



平成22年度北海道医療大学F D研修報告書

# 多様な資質をもつ学生に 対応できる効果的教育方法

北海道医療大学F D委員会

平成22年度北海道医療大学FD研修

# 多様な資質をもつ学生に対応できる 効果的な教育方法

期 日 平成22年8月10日(火)  
場 所 札幌サテライトキャンパス

主 催 北海道医療大学・FD委員会

ディレクター  
国永 史朗

FD委員

平藤 雅彦	齊藤 浩司	久保 勘二	山田 律子
志渡 晃一	小澤 次郎	中野 茂	木下 憲治
松本 由起子	大山 静江	花淵 馨也	千葉 芳広

## 目次

---

はじめに	1
趣旨など	3
参加者名簿	5
進行予定	6
副学長講話	9
ワークショップのプロダクト	
グループ名簿	22
WS1プロダクト	23
WS2、3プロダクト	25
Aグループ（薬学部）	26
Bグループ（歯学部）	29
Cグループ（看護福祉学部・看護学科）	35
Dグループ（看護福祉学部・臨床福祉学科）	37
Eグループ（心理科学部・臨床心理学科、言語聴覚療法学科）	39
参加代表者感想	45
FD委員感想	49
アンケート集計	57
当日資料	61
アルバム	73

はじめに

FD 委員長 国永史朗

平成 22 年度の FD 研修を、メイン・テーマとして「多様な資質をもつ学生に対応できる効果的な教育方法」を掲げて、8 月 10 日、一日バージョンで実施しました。

本学の FD 研修は、2002 年（平成 14 年）にスタートさせていますので、今回で 9 回目となりました。この間、合宿や日帰り 2 日間の研修形態で FD を実施してきました。今回は新たな FD 委員体制となり、形式にも変更が加えられ、一日だけの研修となりました。時間的には短い研修でしたが、いつにも増して活発かつ有意義な、充実した FD にすることができました。学部学科で取り組むべき課題に対して、実効性のあるプロダクトをつくり上げることができ、ここに、報告書としてまとめることができました。

現在、本学をはじめ多くの大学では、共通した課題に直面しています。大学全入時代を迎え、多様な学生が入学してくるようになり、また学生の気質も大きく変化してきています。多様な資質をもつ学生に対して適切に教育を実践することが、多くの大学で重要な課題となっています。本学においても、大学の特色・大学力・教育力をこれまで以上に明確なものにしていくためには、全学的な視点で改革を図っていくことが必要です。質的に大きく転換することが求められています。教育改善の営みは不断に続けていかなければなりません。今回の研修テーマは、本学においてもまさに直面している課題そのものであり、FD の活動はそれに対する具体的な改善策をつくり出す場となりました。

今回の FD を企画するにあたり、常に心していたのは次のキーワードです。

1. FD 研修の実質化
2. 組織的な教育改善の取り組み
3. ボトムアップ形式

この 3 つを基本として、FD 委員会での議論、FD 委員数名からなるワーキンググループ作業、そして大学教育開発センターでの話し合いを行って、FD の設計を進めてきました。

ご存知のように、大学設置基準の改正により、すでに FD は義務化されています。それまでの努力義務から「大学院課程教育」では平成 19 年度より、また「学士課程教育（学部教育課程）」では平成 20 年度より、FD を必ず実施しなければならなくなっています。義務化という言葉には、大学の生き残りをかけて、ますます活動が盛んになるという面がありますが、一方で、そこには皮肉にも研修のマンネリ化が起きかねないという危惧も孕んでいます。また、こんな意見も聞こえてきます。義務化されても、FD で話し合われた事柄が実行されなければ時間の無駄である。現実のものとして機能するものでなければ意味がな

い、などという声です。いずれも正しい声であると思います。研修はFDのスタートであっても、決してゴールではないからです。また、FDは単なる教員個人の授業改革の実施にあるわけではありません。FDの成果が学生への教育に還元されてこそ、意義があるといえます。FDが教員の意識改革へのきっかけになったとしても、それが組織全体としての行動につながり、学生の学力向上を図るものになっていかなければなりません。FD研修のマンネリ化に陥らないために、また時間の無駄であったという声を聞こえてこないようにしなければなりません。今回の企画にあたっては、そんな思いを強くしていました。

チームビルディングという言葉があります。仲間がある考えを一つにして、ある目的に向かって活動していける組織づくりをいいます。多様な学生が入学してくる事態にあり、いままさに、大学の各学部学科はこれまで以上にチームビルディングを強化していかなければなりません。危機意識を共有化している組織は、必ず動くと思えます。そのような確信のもとで、今回、学部学科ごとで現在悩んでいることをテーマとして持ち寄り、FDを行うことにしました。いつも学生の一番近くで教育をしている組織教員が議論を行う。そして、解決策を具体化し、学生教育に反映させる。今回のFDは、このようなやり方で進めていくことにしました。

一方で、そのような研修のやり方であれば、わざわざ全学部学科が一同に集まって活動する必要がないとの意見もありました。しかし、他学部学科の問題を大学全体で共有することは無駄ではありません。相互に研修することで、あらたな考えやノウハウが生まれる可能性があります。互いに知恵を授けあうことができます。実際に、今回の研修では、他の学部ですでもっているノウハウ（OSCE情報など）や物的資源（ポートフォリオなど）を提供可能とする意見が交わされ、有効に機能する場面がありました。医療系総合大学として、学部学科の特性を生かした情報の交換があり、生産的な議論を行うことができたと考えています。

FDの活動は、その機能からこれまでいくつか分類されていますが、今回行ったFD形式をあえて分類するならば、「ボトムアップ型相互研修」となります。本学にふさわしいFDのあり方は何か。FDは大学が主体的に行う課題であるという認識のもとで、今回の形式をさらに検証して、さらに深化させていかなければなりません。ご協力お願いいたします。

今回の研修の日は、心理科学部では前期定期試験の実施の週とちょうど重なってしまいました。そのため、心理科学部からの参加教員が残念ながらやや少なくなってしまいました。そのようなトラブルが生じましたが、FD委員13名を含む総勢41人のもとで研修を行うことができました。研修では、大野副学長から貴重な講話をいただきました。最後になりましたが、副学長をはじめ、FD委員、参加された教員、そして事務職員の皆様に対して、お礼を申し上げます。

---

平成 22 年度 FD 研修 (テーマ編)

**メインテーマ： 多様な資質をもつ学生に対応できる効果的な教育方法**

主催： 北海道医療大学 (FD 委員会)

期日： 平成 22 年 8 月 10 日 (火)

場所： 札幌サテライトキャンパス 講義室 A・B

プロデューサー： 新川詔夫

ディレクター： 国永史朗

FD 委員： 平藤雅彦、齊藤浩司、久保勘二、山田律子、志渡晃一、小澤次郎、  
中野 茂、木下憲治、松本由紀子、大山静江、花淵馨也、千葉芳広  
(タイムマネージャー) 花淵馨也、千葉芳広、小澤次郎、久保勘二

事務： 鈴木英二、四釜禎央、本庄慶子

**趣旨**

大学進学率がほぼ 50% 台となり、本学も多様な背景をもつ学生が入学してくる事態になっています。このような状況は、本学教育の質保証という観点で大きな問題となります。とりわけ、国家試験の合格率を考慮すると、直ちに対応していかなければならない課題の一つであります。諸能力において未開拓・未成熟な学生に対して組織的に教育力を強化し、効果的に対応していくことが重要です。今回の FD 研修では、最初に本課題について全学的な視野で現状を俯瞰します。その上で、各学部・学科ごとに、現在、直面している課題に取り組み、全学でそれを共有し、それぞれの組織において実現可能で効果的な教育方法をつくり出すことを目的とします。

**作業目標**

- 1) 学生の多様な資質を把握できる。
- 2) 多様な資質の学生に対して効果的な教育方策を具体化できる。
- 3) 学部・学科ごとで組織的に具体方策を実現することができる。

**研修形態**

- 1) ボトムアップの課題に対して能動的に活動する。
- 2) 学部・学科単位でグループ作業、討論を行う。
- 3) 学部・学科の課題を全体で共有し、意見交換をする。
- 4) 提案に対して、具体的に組織として実現できる。

---

**FD 委員の役割**

FD 委員はグループ員の一人として作業に加わる

- 1) グループ作業の方法をリード
- 2) WS でのゴールを提供
- 3) グループ作業の進行指導

- 4) グループ作業の軌道修正
- 5) 時間進行のリード

### スケジュールの概要

8月10日(火)

- 8:30 受付
- 9:00 開会 オリエンテーション 参加者の写真撮影
- 9:20 大野 弘機 **副学長講話**  
「医療系総合大学としての目標—新医療人育成の北の拠点を目指して—」
- 10:00 グループ構成 自己紹介
- 10:10 **WS1** 「多様な資質をもつ学生の現状把握と大学全体の取組み」  
A・Bグループ：学力  
C・Dグループ：コミュニケーション能力  
Eグループ：道徳力
- 12:00 昼食会場『とととアスティ45店』(アスティ45ビル1階)  
Tel. 011-219-4566
- 12:50 **WS2** 「学部学科の個別テーマー：問題確認と対策案」
- 14:40 休憩
- 15:00 **WS3** 「学部学科の個別テーマー：対策の具体的実現プログラム」
- 16:50 全体討論 (今後のFD活動について)
- 17:20 アンケート 移動
- 18:00 情報交換会
- 20:00 閉会

### グループの役割分担

- リーダー：WS作業の進行をリード、ゴール把握とスケジュールのデザイン  
一定時間内に作業ができるようにリードする
- 記録係1：作業進行中の内容をメモする
- 記録係2：WSのプロダクトとなる発表内容、討論から修正された内容をいれて記録をし、FDの報告書資料とする。最終的には、ワープロで作成し、グループで一本化して、下記へ提出)
- 発表者：各WSでのプロダクトを発表する
- 発表資料作成：グループ員が協力して作成、OHPシートで発表する
- プロダクト提出先：学務部教務課 大学教育開発センター担当 [edu@c@hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:edu@c@hoku-iryo-u.ac.jp)

**提出期限 8月31日**

# 平成22年度北海道医療大学FD研修参加者名簿

\*氏名:職名順/アイウエオ順/敬称略

所属(学部・学科等)	職名	氏名	専門領域等	備考	
薬学部	8名	教授 ② 青木 隆	分子生命科学(生化学)		
		教授 ② 小田 和明	創薬化学(薬化学)		
		教授 ② 齊藤 浩司	薬剤学(薬剤学)	FD委員	
		教授 ② 豊田 栄子	生命物理科学(薬品物理科学)		
		教授 ② 平藤 雅彦	薬理学(薬理学)	FD委員	
		教授 ② 和田 啓爾	衛生化学(衛生化学)		
		准教授 ② 小林 道也	実務薬学教育研究		
		講師 ② 森元 拓	人間基礎科学		
歯学部	8名	教授 (初) 越智 守生	口腔機能修復・再建学系(クラウンブリッジ・インプラント補綴学)		
		准教授 ② 越野 寿	口腔機能修復・再建学系(咬合再建補綴学)		
		准教授 ② 久保 勘二	人間基礎科学	FD委員	
		講師 (初) 工藤 勝	生体機能・病態学系(歯科麻酔科学)		
		助教 (初) 草野 薫	生体機能・病態学系(顎顔面口腔外科学)		
		助教 (初) 設楽 彰子	口腔生物学系(生化学)		
		助教 (初) 藤田 真理	口腔生物学系(微生物学)		
		助教 (初) 長野 二三	口腔機能修復・再建学系(生体材料学)		
看護福祉学部	看護学科	13名	教授 ② 小林 正伸	生命基礎科学	
			教授 ② 山田 律子	地域保健看護学	FD委員
			准教授 ② 伊藤 道子	母子看護学	
			准教授 ② 佐々木 栄子	成人看護学	
			准教授 ② 萩野 悦子	地域保健看護学	
			講師 ② 竹生 礼子	地域保健看護学	
			講師 ② 伊藤祐紀子	実践基礎看護学	
	臨床福祉学科	教授 ③ 志渡 晃一	医療福祉政策学	FD委員	
		准教授 ② 大友 芳恵	医療福祉臨床学		
		講師 (初) 今野多美子	医療福祉臨床学		
		講師 (初) 福岡 麻紀	医療福祉臨床学		
	人間基礎科学	助教 (初) 池森 康裕	医療福祉臨床学		
		准教授 ③ 小澤 次郎	人間基礎科学	FD委員	
心理科学部	8名	臨床心理学科	教授 ② 中野 茂	FD委員	
			准教授 ③ 柳田 寛	人間基礎科学	
			講師 (初) 松本由起子	人間基礎科学	
			講師 ② 森 伸幸		
言語聴覚療法学科	教授 (初) 木下 憲治	FD委員			
		教授 ② 森若 文雄			
		助教 (初) 小林 健史			
		助教 (初) 柳田 早織			
歯科衛生士専門学校	1名	専任教員 ② 大山 静江		FD委員	
大学教育開発センター	3名	センター長 ⑤ 国永 史朗	人間基礎科学	FD委員	
		准教授 ⑤ 花淵 馨也	人間基礎科学	FD委員	
		講師 ② 千葉 芳広	人間基礎科学	FD委員	
計 41名					

## 【世話役】

プロデューサー	学長 新川 詔夫
	副学長 大野 弘機
ディレクター	国永 史朗
FD委員	大山静江 小澤次郎 木下憲治 久保勘二 齊藤浩司 志渡晃一
	千葉芳広 花淵馨也 平藤雅彦 中野 茂 松本由起子 山田律子
事務	学務部 鈴木英二
	学務部教務課 四釜禎央 本庄慶子

## 進行予定

### 8月9日(月)

16:00 会場設営(事務)

(机の並び:前の方に机5-6列,後方に5つのグループ机の塊(3テーブル/塊)

(写真撮影用の椅子の配置)

---

### 8月10日(火)

8:30 受付

FD委員の直前の打ち合わせ,進行・役割確認など

9:00 開会 オリエンテーション (FD研修ディレクター 国永 史朗)

挨拶 :FDの趣旨,今回のボトムアップ型FD,FD実質化について

本日のFD研修の流れ

WS形態で実施,プロダクトを報告書に印刷する

(WS1:OHPなどの資料提出,

WS2,3の内容をまとめた報告書提出)

9:05 写真撮影

講義室最後部のあらかじめ用意したところで写真撮影

撮影者 四釜 禎央

9:20 大野 弘機 副学長講話 (司会 小澤 次郎)

「医療系総合大学としての目標 一新医療人育成の北の拠点を目指して」

30分講演+10分質疑

本学をめぐる現状,社会的責任,学生本位の教育の必要性,教員のあり方など

10:00 WSグループ構成(名簿参照) 自己紹介 (司会 平藤 雅彦)

グループ名簿にしたがってグループを形成(FD委員もグループに入る)。

参加者の自己紹介(一人,10~15秒程度)。

WSとは,WSでの役割の説明する。

WS1については,グループ名をつけ,発表時その名前で行う。

WS1のプロダクトについては,OHPなどの資料を提出する。

10:10 WS1

「学生の多様な資質の現状把握と大学全体の取組み」(司会 平藤 雅彦)

学生のさまざまな資質について,下記の視点から整理し,それらに対して大学全体としてどのように対応すべきかをまとめ,発表する

( A, Bグループ : 学力の視点から)

( C, Dグループ : コミュニケーション能力という視点から)

( Eグループ : 道徳力という視点から)

11:00 グループ発表・質疑応答・全体討論 (司会 平藤 雅彦)

(各グループ発表 6分×5+質疑応答 3分×5)

(全体討論 15分)

12:00 昼食会場『とととアスティ45店』(アスティ45ビル1階)

TEL 011-219-4566

12:50 **WS2**

「学部学科の個別テーマ：問題確認と対策案」 (司会 木下 憲治)

名簿に従い、グループ構成を行い、ここでは各学部学科で設定したテーマに沿ってWSを行う。

何が問題であるかを具体的に挙げる。

その上で、問題に対しての組織としてのこれまでの評価・反省に基づいて、今後取り組むべき対策案をまとめる。

発表では、問題点とその分析について簡潔に整理し、それに対する対策案のポイントと有効性を提示する。

13:40 グループ発表・質疑応答 (司会 木下 憲治)

発表内容を参加教員全体で共有し、協議を行う。

(各グループ発表 6分×5+質疑応答 3分×5)

(全体討論 15分)

14:40 休憩

15:00 **WS3**

「学部学科の個別テーマ：対策の具体的実現プログラム」(司会 志渡 晃一)

対策案を実際に実現するためのプロセス(たとえば、スケジュール・組織構成・予算・活動内容・評価など)について、具体的な計画をまとめる。

発表では、対策案の実現プランの詳細を提示する。

15:50 グループ発表・質疑応答 (司会 志渡 晃一)

発表内容を参加教員全体で共有し、協議を行う。

(各グループ発表 5分 x 5 + 質疑応答 3分 x 5)

(全体討論 15分)

16:50 全体討論 (今後のFD活動について) (司会 花淵 馨也)

各学部学科のテーマについてのWSでの議論を引き継ぎ、それぞれの取組みについて、意見を交わす。また、学部学科の組織を超えて必要とされる全学的な取組みについて討論を行う。

今後の学部学科を中心としてFD活動のあり方について意見交換を行う。

17:20 アンケート

18:00 情報交換 (司会 久保 勘二)

会場：京王プラザホテル札幌1階『グラスシーズンズ』

(札幌市中央区北5条西7丁目) Tel011-271-1101(代表)

20:00 閉会

---

#### 報告書原稿

1. グループプロダクト

WS2 と WS3 (文字や図などを入れてまとめてください)

2. グループ代表 (WS2, WS3)

感想 400字程度 (電子ファイル・ワード)

3. アンケート集計

事務・大学教育開発センター担当

4. FD委員

感想 400字程度 (電子ファイル・ワード)

5. まえがき

ディレクター

プロダクト、感想の提出先： 学務部教務課 大学教育開発センター担当  
(edu-c@hoku-iryo-u.ac.jp)

提出期限 8月31日

副学長講話

医療系総合大学としての目標

—新医療人育成の北の拠点を目指して—

副学長 大野 弘機

平成22年度 北海道医療大学FD研修会  
「医療系総合大学としての目標 ―新医療人育成の  
北の拠点を目指して―」

## いかに教育力を高めるか

### ― 個人として、組織として ―

副学長 大野弘機

1

## 目次

1. 本学における医学力化の状況（歯学部）
2. FDとは
3. 授業評価・教員評価をどう受けとめるか
4. 個人の教育力を向上させるためには
5. まとめ

2

朝日新聞 平成22年7月27日（火）

### 天声人語

数学者の森さん<sup>森</sup>は京大の教授だったころ、授業で出席をとらなかった。あるとき、出席をとってはいい、学生が言ってきた。単位取得に出席を考慮してほしい、といふことらしい。そこでこう答えたそうだ▶「もちろん、出席しないヤツは少々卒業の出来が悪くても同情するけど、出席したけど卒業の悪いのは後数なくありません」。学生は黙ってしまったそうだ。自身、学生

3

### この記事で思うこと

なぜこれと類似の表現が生き残っているか？  
こうありたいという願望がある？郷愁？  
知的教育の王道？  
教育者の権限、裁量権を表す一つの事例？

「人間は学が存在である」と言う性善説？  
学問の自由を示す一つの表現形？  
現代社会の閉塞状況からの逃避？  
規制状況からの解放？

誰でも「歯切れの良い言葉でこのような喚呼をきりたい」という願望がある。しかし、「言う方も、言われる方も水準が違おう」といったら身も蓋もないか？

4

新入生の学力不足  
大学の65%が配属(文科省調査  
(2010年7月26日 北海道新聞〈夕刊〉))

高校レベルの補習を実施するなど、新入生の学力不足に配属した措置を取っている大学が年々増え、2008年度は全体の65%に上ったことが26日、文部科学省の調査で分かった。

「ゆとり教育」で学習内容が削減され、学力試験を課さない多様な推薦入試も進む、「競争が分らない経済学部生」や「生物未履修の医学部生」らへの対応に苦慮する大学も多いとされる。

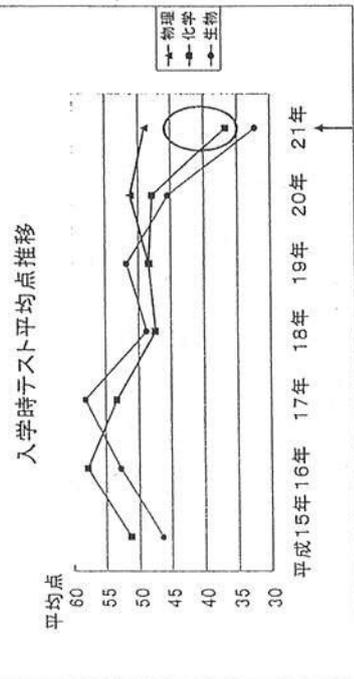
文科省も「専攻分野に不可欠な基礎学力を身に着けずに進学した学生が増えている」とみており、「少子化で大学に入りやすくなったことも影響しているのではないかと」している。

つづき

調査は、昨年12月～今年1月、大学側を除く全国の国公私立大723校を対象に実施。学力不足のほか、高校で対象科目を履修していない学生や帰国子女らに対し、「配属している」と答えた大学は、国立70校、公立35校、私立368校の計473校に選じた。07年度より10校、06年度より37校それぞれ増えた。

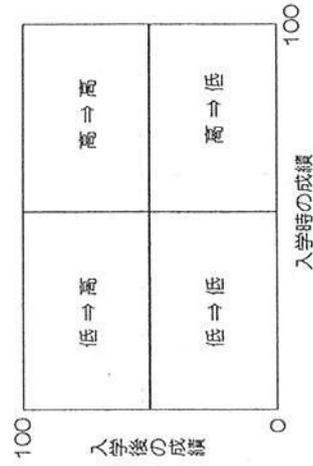
配属した内容を複数回答で尋ねると、「学力別のクラス分け」が282校で最多。次いで「補習授業」が264校、理系科目に多い「既習組・未習組に分けた授業」も120校に上った。

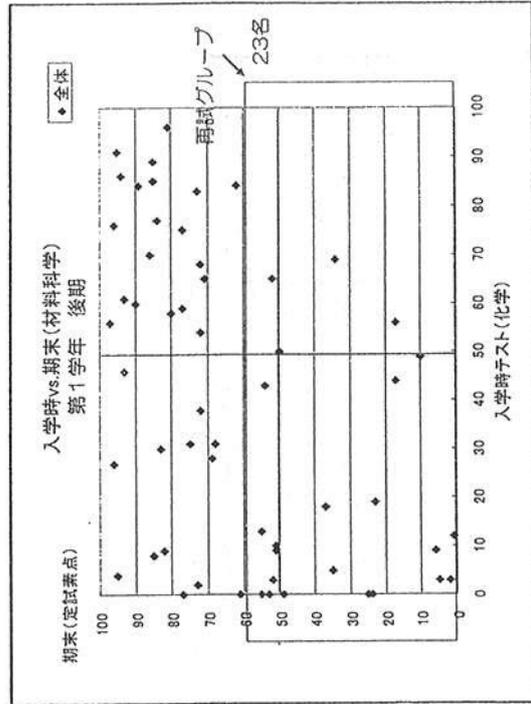
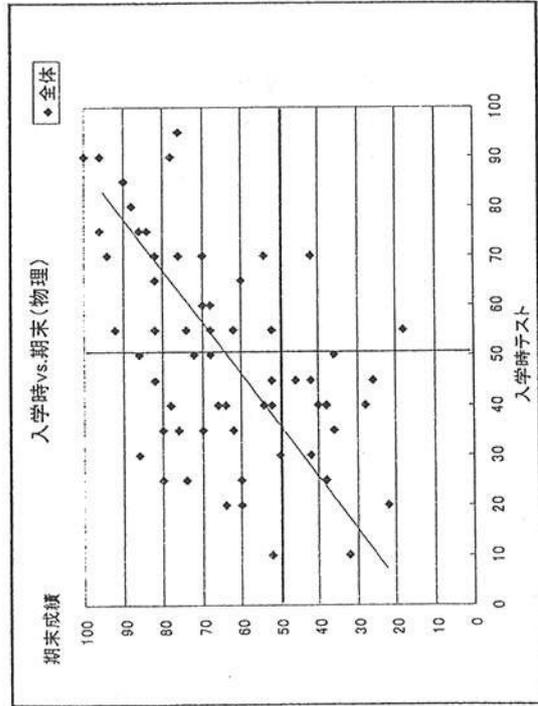
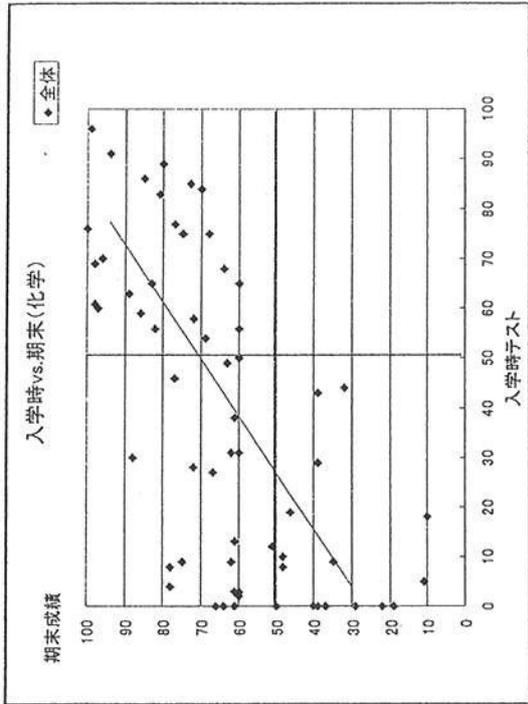
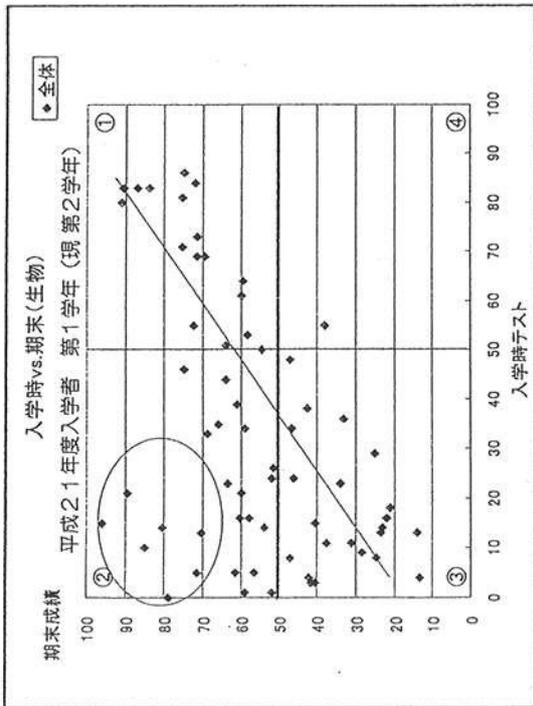
1. 本学における低学力化の状況(歯学部)

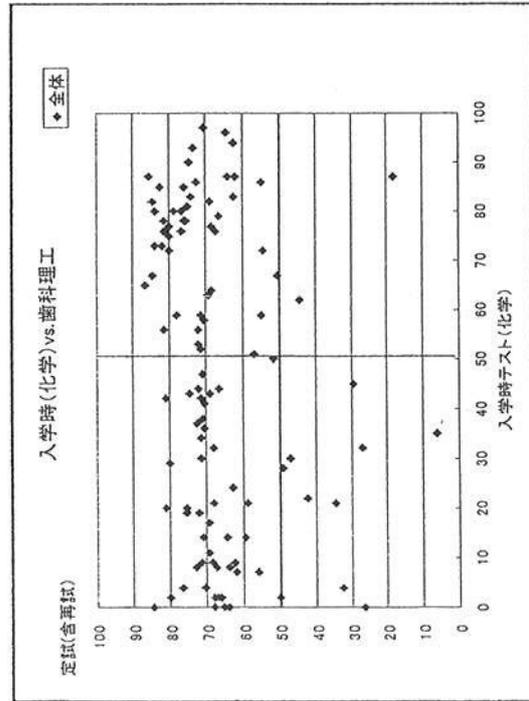
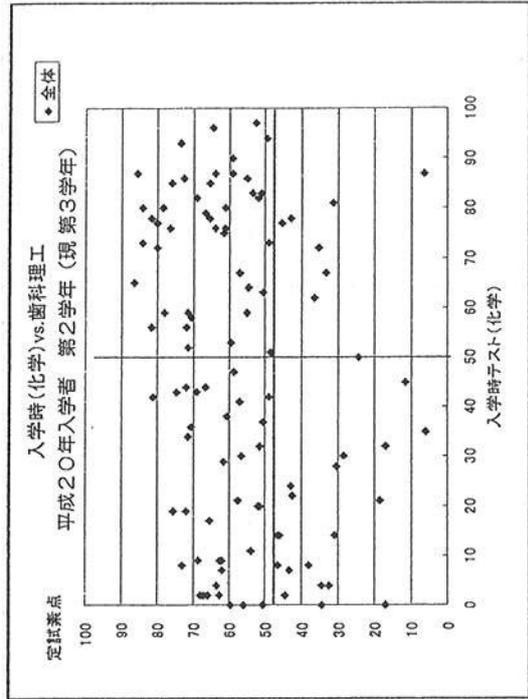
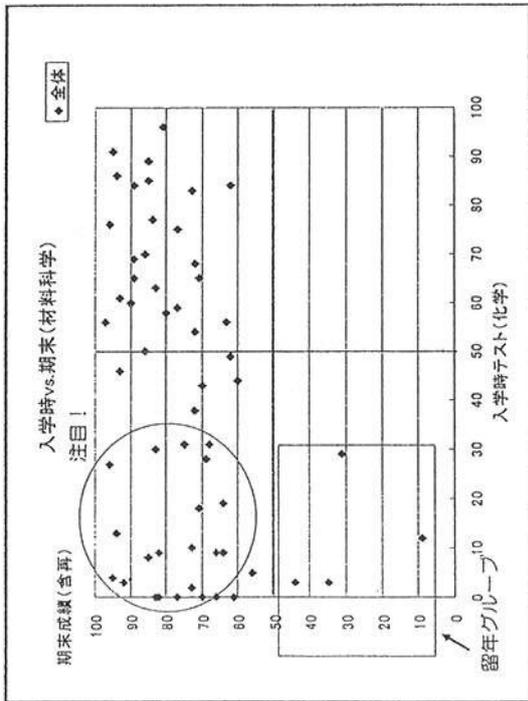


大きく定員割れした

入学時と入学後の成績の相関







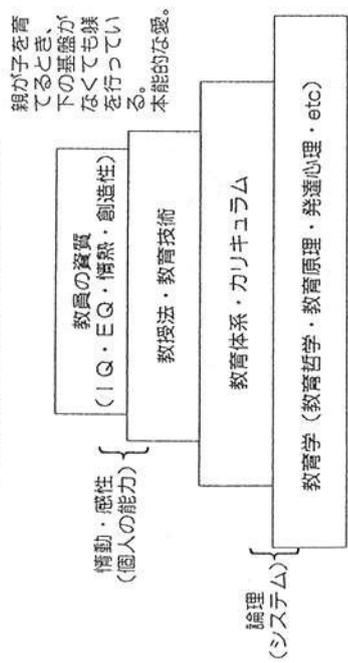
材料科学(D1)と歯科理工学(D2)の成績から考えること

- 専門科目になると入学時と入学後の相関が低くなる。高校の学力が必ずしも反映しない。入学時に低い点数であっても、高い得点を取る学生がいる。
- 受験科目の偏差値による入学生の学力判定に疑問。
- 偏差値は学習意欲の判定スケールではない。教育の力を信じて、偏差値だけで判断しないようにしたい。

16

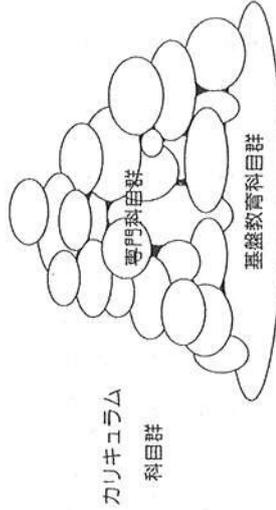
## 2. FDとは

4つの階層を充実する過程である



17

## 教育体系・カリキュラム



望まれる医療人の姿や教育目標を共有すること。そして、最終ゴールを認識し、全体のシステムの中における自分の位置と役割を認識することが重要である。

18

学生との人間関係をいかに構築するか  
(世代のギャップを乗り越えて)

永遠につづく世代のギャップ  
(個人差がある。感覚的である。)



社会性・コミュニケーションの陶冶

自分の世界に沈没  
キシル  
いじめの横行 (陰湿化?)  
社会との接触が稀薄

19

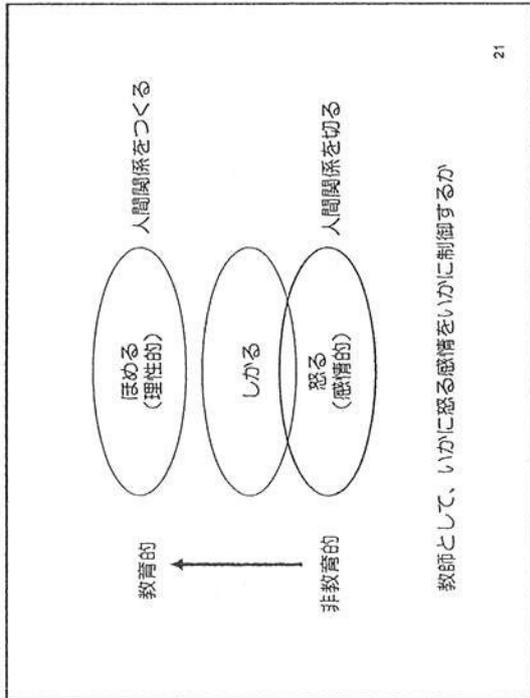
世代間のギャップを乗り越える必要がある。

人の居ないところには教育は成立しない。

人が集ってルールが生まれ、社会が形成される。

人間関係を断ち切っては教育は成立しない。

20



21

教師として大切な資質

知能指数      感情指数

I Q (intelligence quotient)、EQ (emotional quotient)、そして創造性である。

22

- ### EQの5つの要素
1. 自分を知る-自分の本来の気持ちを自覚し尊重し、心から納得できる決断を下す能力。
  2. 自分の感情を上手に抑制する-衝動を自制し不安や怒りのようなストレスの元になる感情を制御する能力。
  3. 自らやる気-挫折した時でも希望をもって自分自身を励ます能力。
  4. 感情移入-他人の気持ちを感じとったり、それに応じてあげること出来る共感能力。
  5. 集団の中で調和を保ち、協力し合う社会的能力。
- EQとは、後天的に向上できる能力である。社会性や人間性をあらわす要素で、人生経験によって高められる能力である。

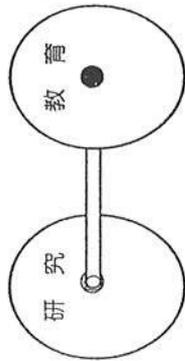
23

- IQ、EQ、そして創造性という点、人間に本来的に備わった能力であり、努力してもしようがないと思えるかもしれないが、ここでの意味は、決定論的な意味ではない。
- IQ的能力：事前によく準備して講義に臨むことによってIQ的能力を高めおこなうことができる。
  - EQ的能力：してはいけないこと、人として望ましいあり方を認識することによってEQ的能力を高めおこなうことができる。
  - 創造的能力：工夫する能力である。どのようにしたら理解して与えられるかをよく考えることである。何とかしたいと継続的に考えることで高めおこなうことができる。創造的能力が発揮できるかどうかは問題意識を持てるかどうかである。

24

### 研究と教育は両輪である

研究で培われる教育能力とは？  
論理的思考方法・表現力、分析力・解析力、および創造性を  
陶冶する手段として有効である。  
FDの一つの手段である。

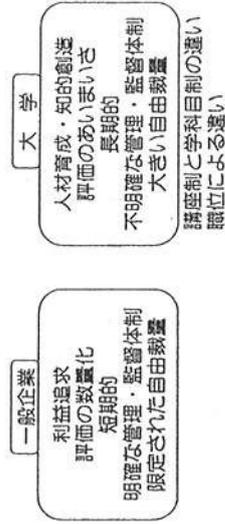


優れた研究者は優れた教育者になれる可能性がある。  
しかし、優れた研究者がならず優れた教育者になれるというわけではない。<sup>25</sup>

25

### 3. 授業評価・教員評価をどう受けとめるか

#### 職業としての大学教員の特殊性



26

### 教育義務

国の総務補助金を受給するための教職としての義務。  
年間165時間(83コマ)の教育義務(医歯系は除く)がある。  
前期(15週)・後期(15週)とすると、通年で約2.7(1週間)  
の教育義務が課せられる。

講義の事前準備に2コマ、事後に1コマ費やしたと仮定すると、  
2.7(講義時間) + 2.7 × 2(事前準備) + 2.7 × 1(事後) = 10.8コマ  
合計10.8コマ(1週間当たり)の教育義務が課せられる。

勤務時間：4コマ(1日) × 5日 → 20コマ(1週間)  
教育義務割合(1週間)：10.8/20 = 0.54

27

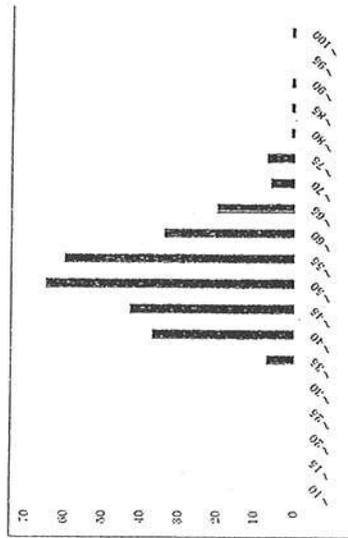
大学の常識は、一般社会の非常識にならないように

仕事の時間配分についての自由度が大きい。  
時間の制御が個人に任されている。  
教育に占有される時間は、個人の勤務時間の50%である。  
残りの50%の時間の使い方について、説明責任が発生する。

責任を説明する方法として、教員評価・授業評価をとらえる。

28

大学の教員評価（全体）の分布



第1学年 材料科学

平成20年

卒業アンケート結果

歯学部

4.6.2010 必修

科目名: 材料科学

担当: 佐藤 隆

履修者数: 1名 退席者数: 0名

履修率: 100%

平均評価: 4.0

満足度: 70%

コメント: 授業内容が面白く、実習が役に立った。

改善点: 実習の時間をもう少し長くしてほしい。

その他: 先生が丁寧でわかりやすい。

質問: 材料科学の将来の発展について教えてください。

回答: 材料科学は、新しい材料の開発や、環境問題の解決に大きく貢献しています。今後もさらなる発展を期待しています。

質問: 材料科学の基礎知識をどのように活用していますか？

回答: 歯科の材料選択や、治療器具の理解に役立っています。

質問: 材料科学の学習で最も苦労した点は？

回答: 材料の特性の違いを覚えるのが大変でした。

回答: 先生のおかげで、理解が深まりました。

質問: 材料科学の分野で興味がある材料は？

回答: 炭素繊維や、生体材料に興味があります。

回答: 先生が詳しく説明してくださって、興味が増えました。

質問: 材料科学の分野で将来のキャリアパスは？

回答: 材料開発や、品質管理の分野で働きたいです。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、感謝しています。

質問: 材料科学の分野で最新の技術は？

回答: ナノ材料や、スマート材料が最新の技術です。

回答: 先生が最新の情報を提供してくださって、勉強になりました。

質問: 材料科学の分野で就職先は？

回答: 材料メーカーや、研究機関に就職したいです。

回答: 先生が就職先を紹介してくださって、助かりました。

質問: 材料科学の分野で必要なスキルは？

回答: 実験技術や、材料の特性を理解する能力が必要です。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、スキルが身につきました。

質問: 材料科学の分野で必要な知識は？

回答: 材料の組成や、加工方法に関する知識が必要です。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、知識が身につきました。

質問: 材料科学の分野で必要な資格は？

回答: 材料工学士の資格があると有利です。

回答: 先生が資格取得のサポートをしてくださって、感謝しています。

質問: 材料科学の分野で必要な英語力は？

回答: 英語力があれば、最新の論文を読むことができます。

回答: 先生が英語学習のサポートをしてくださって、英語力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なコミュニケーション能力は？

回答: チームワークや、プレゼンテーション能力が必要です。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、コミュニケーション能力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なリーダーシップは？

回答: リーダーシップがあれば、チームを引っ張ることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、リーダーシップが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な創造力は？

回答: 創造力があれば、新しい材料の開発ができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、創造力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題解決能力は？

回答: 問題解決能力があれば、難しい課題を解決できます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題解決能力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なチームワークは？

回答: チームワークがあれば、チームで力を発揮できます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、チームワークが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な時間管理能力は？

回答: 時間管理能力があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、時間管理能力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な自己管理能力は？

回答: 自己管理能力があれば、自己学習を進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、自己管理能力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な継続力（ペルセベランス）は？

回答: 継続力があれば、難しい課題を最後までやり遂げることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、継続力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な好奇心は？

回答: 好奇心があれば、新しい発見を見つけることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、好奇心が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な柔軟性は？

回答: 柔軟性があれば、状況に応じて対応することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、柔軟性が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なリスク管理能力は？

回答: リスク管理能力があれば、失敗を最小限に抑えることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、リスク管理能力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な決断力は？

回答: 決断力があれば、重要な決断を迅速に行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、決断力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な責任感（アカウンタビリティ）は？

回答: 責任感があれば、自分の役割をしっかりと果たすことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、責任感が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な誠実さは？

回答: 誠実さがあれば、信頼を得ることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、誠実さが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な正直さは？

回答: 正直さがあれば、真実を伝えることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、正直さが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な謙虚さは？

回答: 謙虚さがあれば、他人の長所を学ぶことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、謙虚さが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な礼儀正しさは？

回答: 礼儀正しさがあれば、社会的に受け入れられます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、礼儀正しさが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な忍耐強さは？

回答: 忍耐強さがあれば、長い期間の作業をこなすことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、忍耐強さが向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な集中力は？

回答: 集中力があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、集中力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な記憶力は？

回答: 記憶力があれば、過去の経験や知識を思い出せます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、記憶力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な想像力は？

回答: 想像力があれば、新しいアイデアを生み出すことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、想像力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な観察力は？

回答: 観察力があれば、細かな変化を捉えることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、観察力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な分析力は？

回答: 分析力があれば、問題を分解して解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、分析力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な判断力は？

回答: 判断力があれば、適切な選択を行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、判断力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な意思決定力は？

回答: 意思決定力があれば、重要な決断を迅速に行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、意思決定力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題発見力は？

回答: 問題発見力があれば、新しい課題を見つけることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題発見力が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題解決力（クリエティビティ）は？

回答: 問題解決力（クリエティビティ）があれば、難しい課題を創造的に解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題解決力（クリエティビティ）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なコミュニケーション能力（チームワーク）は？

回答: コミュニケーション能力（チームワーク）があれば、チームで力を発揮することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、コミュニケーション能力（チームワーク）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な時間管理能力（スケジュール管理）は？

回答: 時間管理能力（スケジュール管理）があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、時間管理能力（スケジュール管理）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な自己管理能力（セルフマネジメント）は？

回答: 自己管理能力（セルフマネジメント）があれば、自己学習を進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、自己管理能力（セルフマネジメント）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な継続力（ペルセベランス）（モチベーション）は？

回答: 継続力（ペルセベランス）（モチベーション）があれば、長い期間の作業をこなすことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、継続力（ペルセベランス）（モチベーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な集中力（フォーカス）は？

回答: 集中力（フォーカス）があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、集中力（フォーカス）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な記憶力（メモリー）は？

回答: 記憶力（メモリー）があれば、過去の経験や知識を思い出せます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、記憶力（メモリー）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な想像力（イマジネーション）は？

回答: 想像力（イマジネーション）があれば、新しいアイデアを生み出すことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、想像力（イマジネーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な観察力（オビザベーション）は？

回答: 観察力（オビザベーション）があれば、細かな変化を捉えることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、観察力（オビザベーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な分析力（アナリシス）は？

回答: 分析力（アナリシス）があれば、問題を分解して解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、分析力（アナリシス）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な判断力（ジャッジメント）は？

回答: 判断力（ジャッジメント）があれば、適切な選択を行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、判断力（ジャッジメント）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な意思決定力（ディシジョンメイキング）は？

回答: 意思決定力（ディシジョンメイキング）があれば、重要な決断を迅速に行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、意思決定力（ディシジョンメイキング）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題発見力（プロブレムフィッディング）は？

回答: 問題発見力（プロブレムフィッディング）があれば、新しい課題を見つけることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題発見力（プロブレムフィッディング）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）は？

回答: 問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）があれば、難しい課題を創造的に解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なコミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）は？

回答: コミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）があれば、チームで力を発揮することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、コミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）は？

回答: 時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）は？

回答: 自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）があれば、自己学習を進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な継続力（ペルセベランス）（モチベーション）（レジリエンス）は？

回答: 継続力（ペルセベランス）（モチベーション）（レジリエンス）があれば、長い期間の作業をこなすことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、継続力（ペルセベランス）（モチベーション）（レジリエンス）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な集中力（フォーカス）（フロー）は？

回答: 集中力（フォーカス）（フロー）があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、集中力（フォーカス）（フロー）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な記憶力（メモリー）（認知）は？

回答: 記憶力（メモリー）（認知）があれば、過去の経験や知識を思い出せます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、記憶力（メモリー）（認知）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な想像力（イマジネーション）（創造性）は？

回答: 想像力（イマジネーション）（創造性）があれば、新しいアイデアを生み出すことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、想像力（イマジネーション）（創造性）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な観察力（オビザベーション）（観察）は？

回答: 観察力（オビザベーション）（観察）があれば、細かな変化を捉えることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、観察力（オビザベーション）（観察）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な分析力（アナリシス）（分析）は？

回答: 分析力（アナリシス）（分析）があれば、問題を分解して解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、分析力（アナリシス）（分析）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な判断力（ジャッジメント）（判断）は？

回答: 判断力（ジャッジメント）（判断）があれば、適切な選択を行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、判断力（ジャッジメント）（判断）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な意思決定力（ディシジョンメイキング）（意思決定）は？

回答: 意思決定力（ディシジョンメイキング）（意思決定）があれば、重要な決断を迅速に行うことができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、意思決定力（ディシジョンメイキング）（意思決定）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題発見力（プロブレムフィッディング）（問題発見）は？

回答: 問題発見力（プロブレムフィッディング）（問題発見）があれば、新しい課題を見つけることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題発見力（プロブレムフィッディング）（問題発見）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）（問題解決）は？

回答: 問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）（問題解決）があれば、難しい課題を創造的に解決することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、問題解決力（クリエティビティ）（イノベーション）（問題解決）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要なコミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）（コミュニケーション）は？

回答: コミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）（コミュニケーション）があれば、チームで力を発揮することができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、コミュニケーション能力（チームワーク）（コラボレーション）（コミュニケーション）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）（時間管理）は？

回答: 時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）（時間管理）があれば、作業を効率的に進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、時間管理能力（スケジュール管理）（タイムマネジメント）（時間管理）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）（自己管理）は？

回答: 自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）（自己管理）があれば、自己学習を進めることができます。

回答: 先生が丁寧に指導してくださって、自己管理能力（セルフマネジメント）（自己啓発）（自己管理）が向上しました。

質問: 材料科学の分野で必要な継続力（ペルセベランス）（モチベーション）（レジリエンス）（継続力）は？

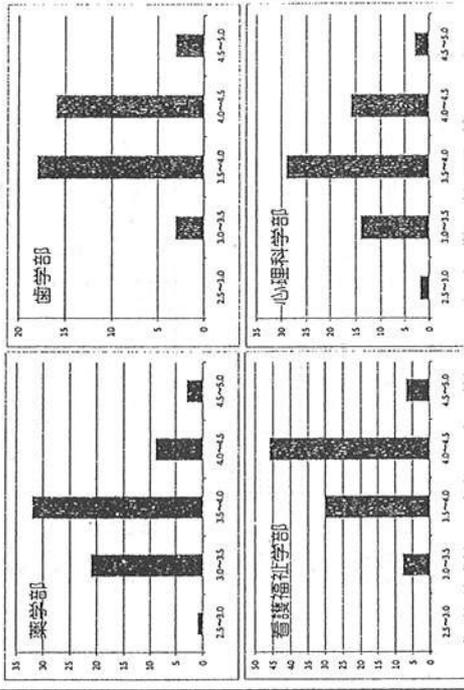
回答: 継続力（ペルセベランス）（モチベーション）（レジリエンス）（継続力）があれば、長い期間の作業をこなすことができます。

### 歯学部第2学年 歯科理工学

- ・ 20年度は、私の過去最高であった。
- ・ しかし、21年度の結果は??
- ・ 同じ資料を使っているのに、油断するところの連続です。原因については、自分で認識していないが、学生からのコメントにその原因が表現されていた。
- ・ 明確なことは、「どのように教えるか」を毎回考えることである。反省している。

33

### 平成21年度（前期） 学生の授業評価結果



### 4. 個々人の教育力を向上させるためには

- ・ 教育力向上の方法は個々の教員の態様に任されている。
- ・ が、良い教員とは何か?どのようなか?を認識し、望ましい姿をとらせることが大切である。
- ・ そして自分と比較し、その差異を感じることから教育力向上の意識が芽生える。
- ・ 教員としての素質や資質といった決定的な考えからは何も生まれない。
- ・ 同じ人であっても心の持ち方一つでいくだけでも改善できる。

36

不明確な管理・監督体制と大きな自由裁量に負合うだけの自己規制と説明責任がある。管理強化に移行させないためにも。

●受動的か? : 説明責任を果たす方法として位置づける。

●能動的か? : 自己を相対化する作業であると位置づける。

いずれにしても、他者評価（第三者評価）にも耐えられる自己評価でありたい。

35

### 教育力向上の目標

教員全員が4.0以上の授業評価を追い求めよう！！

“追い求める”の意味

設問項目は、絶対的評価であるが、評価する学生は、個々の教員を相対的に見ている。従って、教員集団の教育力が向上した場合、目標の4.0が逃げていく。しかし、それであっても4.0以上を獲得するよう努力しよう。

4.0以下の場合には自分自身の講義内容と方法をよく考え、改めて改善しよう。

37

### 5. まとめ

- 日本も同世代の半数以上が大学に進学するユニバーサル化時代を迎えた。
- 学生の意識は多様化し、学習目的の曖昧な学生や動機付けの低い学生も出てくる。
- 教員は学習目的の定まらない学生にも対応し、適切な指導力を発揮することを求められている。
- 「大学は立派な研究者をそろえさえすればいいのだ」という時代ではない。今の大学には、「受け入れたからには責任をもって教育をし、高い品質を保証して世に送り出す」ということが求められている。

38

最後に

Dery四ヶ条

1. 怒らない
2. 一人よがりにならない
3. 素材が悪いと言わない
4. 教育は教員の私有物ではない

40

- 入学時の学力が低くても、教育の改善によって、学生の学力を向上させることができる。
- 「入学者の資質が悪い」などと決して口にしてはいけない。素材の悪さを理由に教育改善を怠ってはいけない。
- 学生が何が分からないかを教員が分からないのが問題。そのためには、学生とよく会話することが大切である。
- 学生による授業評価は正しい。教育改善の指標にすべきだ。油断すると教育の質がすぐ落ちる。

39

## ワークショップのプロダクト

# FDグループ編成名簿

## WS1

☆:FD委員 (順不同/敬称略)

班区分		氏名	
A	(8名)	青木 隆	竹生 礼子
		和田 啓爾	小澤 次郎☆
		久保 堪二☆	松本由起子☆
		小林 正伸	柳田 早織
B	(9名)	小田 和明	伊藤祐紀子
		小林 道也	福間 麻紀
		草野 薫	森 伸幸
		工藤 勝	山田 律子☆
		国永 史朗☆	
C	(8名)	豊田 栄子	志渡 晃一☆
		森元 拓	池森 康裕
		設楽 彰子	木下 憲治☆
		伊藤 道子	大山 静江☆
D	(8名)	齊藤 浩司☆	大友 芳恵
		越智 守生	中野 茂☆
		藤田 真理	森若 文雄
		佐々木栄子	花淵 馨也☆
E	(8名)	平藤 雅彦☆	今野多美子
		越野 寿	柳田 寛
		長野 二三	小林 健史
		萩野 悦子	千葉 芳広☆

## WS2, 3

班区分		氏名	
A (薬学部)	(8名)	青木 隆	小田 和明
		齊藤 浩司☆	豊田 栄子
		平藤 雅彦☆	和田 啓爾
		小林 道也	森元 拓
B (歯学部)	(9名)	越智 守生	越野 寿
		久保 勘二☆	工藤 勝
		草野 薫	設楽 彰子
		藤田 真理	長野 二三
		大山 静江☆	
C (看護福祉学部) 看護学科	(8名)	小林 正伸	山田 律子☆
		伊藤 道子	佐々木栄子
		萩野 悦子	竹生 礼子
		伊藤祐紀子	千葉 芳広☆
D (看護福祉学部) 臨床福祉学科	(8名)	志渡 晃一☆	大友 芳恵
		今野多美子	池森 康裕
		福間 麻紀	小澤 次郎☆
		国永 史朗☆	花淵 馨也☆
E (心理科学部)	(8名)	中野 茂☆	柳田 寛
		松本由起子☆	森 伸幸
		木下 憲治☆	森若 文雄
		小林 健史	柳田 早織

## WS 1のプロダクト

## WS1 「多様な資質をもつ学生の現状把握と大学全体の取組み」

平成22年度FD研修では、午前中の約2時間を使い、「多様な資質をもつ学生の現状把握と大学全体の取組み」という全学的テーマでWS1への取組みがなされた。午後に二つ開催されたWSと違い、WS1で組織された5つのグループでは各学部学科のメンバーが混在した。その意味で、学部間の交流もはかられて、全学的なプロジェクトが構想しやすいものとなった。A・Bグループは学力、C・Dグループはコミュニケーション能力、Eグループは道徳力と関連して議論し、発表をおこなった。以下、各グループの報告内容を順にまとめたい。

Aグループは、学力に関する現状把握において学力が二分化し、低学力学生の学力は向上しにくい点を指摘した。その原因として、読み書き、計算など基礎学力の低さを挙げている。また暗記はよくできるが、深く理解する能力は欠いているとした。対策として、勉強のモチベーションを上げる授業、記述式問題での理解度チェックなど、教育内容の工夫が示された。また、入学試験などを通じた、低学力学生の早期選定の必要性も指摘している。

Bグループは、学力の問題を学生と教員の二つの側面から把握している。学生の抱える問題として、大学で学ぶことのモチベーションの低さ、学び方がわからないなどの自己解決能力の低さがある。教員としては、国家資格試験合格が目的としてあるために、良い成績を学力としてとらえる傾向があることを示した。対策として、進級のハードルを上げる、補正教育の実施の工夫、体験学習を通じたモチベーションの向上を挙げた。

コミュニケーション能力を扱ったCグループは、議論が下手であること、仲間以外との会話が苦手であることを問題とした。前者について、少人数によるグループ学習を早期に実践すること、コミュニケーションに関する授業を増やすことを解決策とした。後者について、OSCEをはじめとした臨床教育で、会話の閉鎖性が改善されるとしている。

Dグループは、コミュニケーション能力は客観的に把握しづらい性格を持つという前提に立って、発達障害と思われる学生の問題、低学力化とコミュニケーション能力低下との関係を指摘した。対策に、入学時にグループ面接を実施してコミュニケーション能力を把握すること、臨床現場でのコミュニケーション能力に関する情報を教員全体で共有することがある。また、全学部でのOSCEへの取組みも一案とした。

Eグループは、学生が必要とする道徳力として、社会人としての倫理から専門職業人としての倫理まで広範囲に議論を広げて幾つかの改善点を挙げた。人との接し方、公共の場でのマナー、講義・実習でのマナーである。学生が道徳力を身に付けるため、担任などによる個人面談を通じて、教員が学生を個人的に把握することが重要であるとした。また道徳をテーマに、学生がWSに参加したり、講義を受けることを対策とした。

このように、教員が学部を超えて交流するだけでなく、学生の学力向上のためのアイデアが多く出されている。

## WS 2, 3のプロジェクト

### A班（薬学部）

「学生の学力向上を目指した薬剤師養成教育の実践」

### B班（歯学部）

「低学力学生（または卒延者）の選定と具体的な授業方法」

### C班（看護福祉学部看護学科）

「学生が臨床実践能力をいかに身につけるか  
～学生の到達度と科目間のリンケージ」

### D班（看護福祉学部臨床福祉学科）

「学生の生活・就学支援に向けて」

### E班（心理科学部）

「学生の学力の多様化とカリキュラムの実質化に向けて」

## A班（薬学部）

### テーマ「学生の学力向上を目指した薬剤師養成教育の実践」

#### WS2 薬学部学生の学力の問題点

##### ☆モチベーションが低い

- \*授業の欠席・遅刻が多い、講義途中で席を立つ
- \*授業中、私語が多い
- \*集中力がない
- \*学問に対する興味を持ってない
- \*モラルが低い
  - ・電子機器（ゲーム機など）の持ち込み
  - ・教科書を持っていない

##### ☆基礎学力の低下（常識不足）

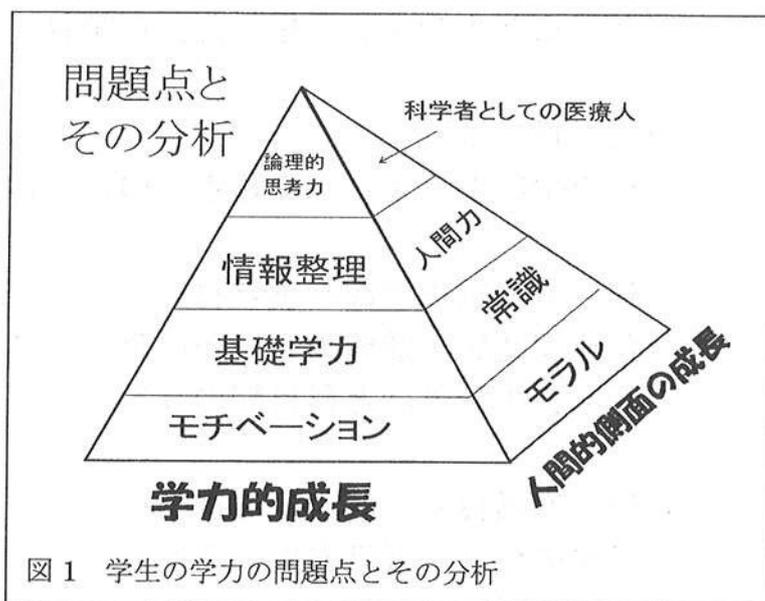
- \*国語力がない
- \*質問のレベルが低い
- \*説明が下手
- \*理解力不足
- \*算数力の低下
  - ・四則演算が危うい
  - ・比例計算ができない  
(比例式を立てられない)

##### ☆情報整理能力が低い（人間力の低下）

- \*ノートを作れない
- \*レポートは人のもの（あるいは wikipedia）をコピーペースト

##### ☆論理的思考力の不足（科学者としての医療人）

- \*論理的な話ができない
- \*疑問に思うことが少ない
- \*勉強の仕方が分からない
  - ・何を覚えたらよいか分からない
  - ・すぐに解を求める
- \*創造力の欠如



これらをまとめると、図1のようなピラミッド構造となり、底辺から改善していかなければ解決にはつながらないと考えられる。

## 対応策のポイント

対応策のポイントまとめると、図2のような模式図を描くことができる。

☆モチベーション・モラルが低い

- \* 将来へのビジョンを伝える
  - ・ 早期体験学習
  - ・ 薬剤師の魅力を伝える講義
- etc

☆基礎学力の低下（常識不足）

- \* 個性差教育
  - ・ 学生の個性差の認識
  - ・ 補正授業（成績の低い講義について系ごとに補習講義）

etc

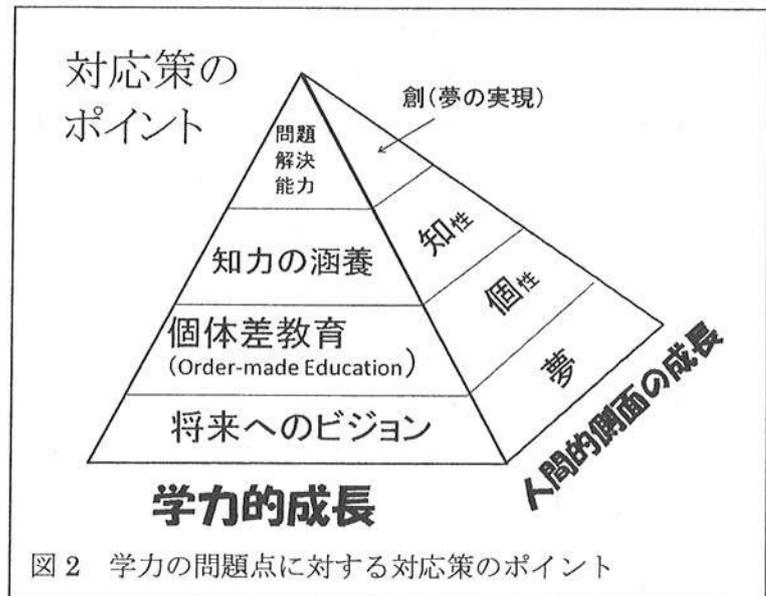


図2 学力の問題点に対する対応策のポイント

☆情報整理能力が低い（人間力の低下）

- \* 知力の涵養
  - ・ 記述式試験を増やす
  - ・ 学生同士による授業

etc

☆論理的思考力の不足（科学者としての医療人）

- \* 問題解決能力の醸成
  - ・ 薬学基礎研究
  - ・ 卒業研究（調査研究含む）

## WS3 「個体差教育 (OE) の実践」

WS2で話し合った個体差教育 (OE) の実践にテーマを絞りより具体的に詰めることとした。

### 成績下位者への補正教育

☆薬学特別演習→成績下位者の補正教育

\*もっと少人数教育へ

- 授業担当者が行う (経験豊富な教員が担当)
- 若い教員には研究に専念してほしい
- 定年退職教員の活用 ⇒ 薬学教育センター (仮称)

\*中央講義棟の講義室・演習室の問題点の改善

- 講義室・演習室の絶対的不足
- 演習室の授業を行う環境を快適に (ホワイトボード、マイク等の整備)

\*成績下位者の到達目標?

- CBT 合格可能までに基礎学力を向上させる。(Web を利用した想定問題の活用)

\*薬理・衛生系の補正教育を4年生にも再度行う。(現在は3年生のみ)

\*薬剤系の補正教育の拡充

- カリキュラムの改訂 (4年前期に実施されている薬剤系・実務系講義の一部を3年後期への移動)

☆薬学教育センター (仮称) の創設 (成績下位者のための補正教育専門部門)

- 5名程度の専任教員 (定年退職教員を中心に充てる) を配置し、長い経験を生かした補正教育に特化した教育を担当する。

☆担任制の強化

- 面談回数を増加 → 学生の個体差 (個性、人となり) をより詳細に認識
- 授業担当学年と担任を一致させる等、運用をより柔軟に

### 成績上位者への補正教育

☆薬学基礎研究の充実

☆成績上位の学生をさらにのばす補正教育 (アドバンス教育)

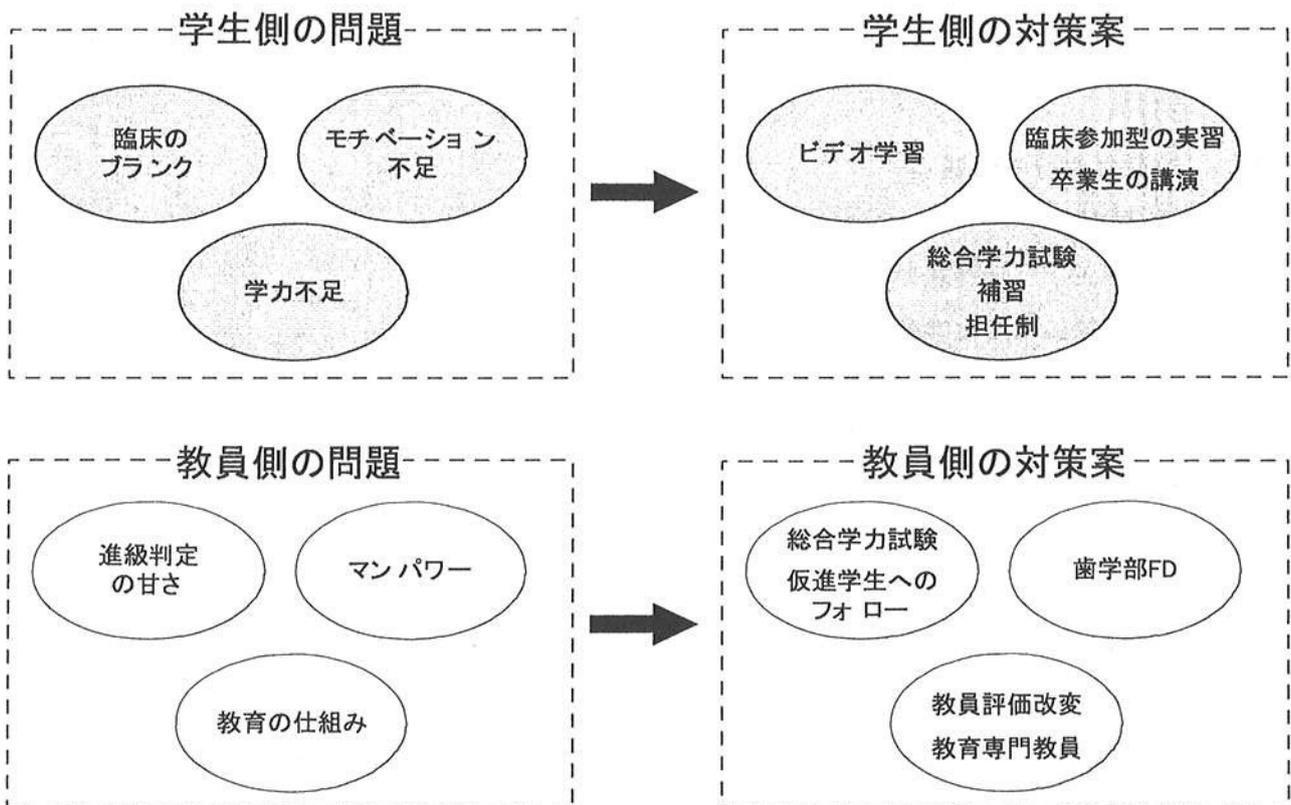
- 将来の専門薬剤師等のコース → 薬学総合研究の調査研究の一部として

## B班（歯学部）

### テーマ「低学力学生（または卒延者）の選定と具体的授業方法について」 サブテーマ「卒業延期生の増加抑制のために」

#### WS2 問題の確認と対策案

卒業試験に不合格し、卒業できなかった学生（卒延生）が年々増加してきている（現在 36 名）。なぜ増加してしまったのか？今後減少させていくために何をしなければいけないのかを考える。



## <問題点の確認>

### (1) 卒延生の問題点

#### ①学力不足

- ・必要な学力を身に付けないまま6年に
- ・勉強法も身に付いていない
- ・学力不足に関わらず欠席が多い

#### ②モチベーション

- ・何のための勉強か、どんな人間（歯科医）になるのかというビジョンがない
- ・人任せな考え方で、積極的に学習する意欲に欠ける
- ・危機感が欠けている

#### ③臨床のブランク（卒業延期を繰り返している学生について）

- ・補綴物の製作手順や術式などをイメージとして思い出せない
- ・臨床問題が暗記中心になってしまい、応用力に欠ける

### (2) 教育における問題点

#### ①進級判定

- ・進級および仮進級の判定基準に甘さ
- ・仮進級になった学生に対する教育が不足

#### ②マンパワー

- ・個別指導を行いたい但し人員が不足
- ・教育に費やす時間に個人差
- ・メンタル面などにおける指導力に不安

#### ③教育の仕組み

- ・教員は様々な業務または役職を兼任しており、教育を専門で行う人がいない
- ・教育があまり評価されない仕組み
- ・教育に費やす時間を個人の熱意に任せる部分が多く、特定の人に負担が偏る

## <対策案>

### ～学生側の問題について～

#### (1) 学力不足

- ・各学年に総合学力試験（それまでに習った全内容が試験範囲）を導入

繰り返しの学習により学力アップ

苦手科目を克服する機会が増える

低学年から勉強しなければいけないという危機感ができる

- ・補習

低学力学生に合わせた講義が可能

個別指導に近い形式で指導できる

- ・担任制

勉強法や出席状況などの個別指導

危機感を持たせる

#### (2) モチベーション

- ・実際の診療のような、問診→リコールまでのロールプレイング形式の実習を行い興味を持たせる

- ・卒業生の講演を通して興味を持たせる

#### (3) 臨床のブランク

- ・診療や製作の流れを理解できるようなビデオを作成する

- ・ビデオをイントラネットにアップし、自由にアクセスし学習できるようにする

### ～教員側の問題について～

#### (1) 進級判定

総合学力試験の結果を分析することにより、各教科に対する学生の理解度がわかる。

仮進級になった学生を再教育する仕組みを作る

#### (2) マンパワー

歯学部独自のFDを行い、教員の意識改革、教育力の向上のきっかけとする

#### (3) 教育の仕組み

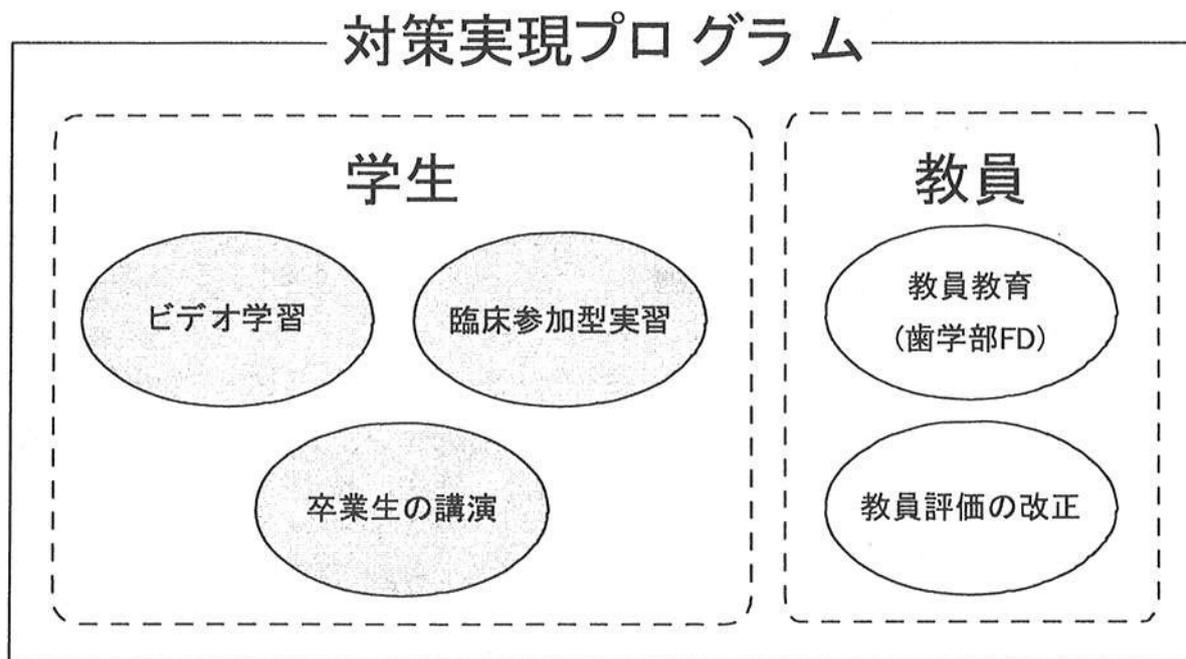
- ・教育をもっと高く評価するよう教員評価の仕組みを変える

- ・講義の質を高めるため、学生の評価以外に講義を評価する仕組みを作る

- ・教育を専門で行う教員をおき、教育のリーダーとする

### WS3 対策の具体的実現プログラム

卒業試験に不合格し、卒業できなかった学生(卒延生)が年々増加してきている(現在 36 名)。なぜ増加してしまったのか?今後減少させていくために何をしなければいけないのかを考える。



## 対策実現プログラム ～学生編～

### (1) 臨床問題対策 ～ビデオ教材を活用～

目的：製作法や治療の流れなどを視覚的に理解する

計画：現在、臨床系9科において製作が進行中であるOSCE用の視覚教材を改良し、国家試験対策視覚教材を作る。

#### <具体的応用法>

- ① 臨床系9科それぞれで国家試験用の視覚教材を作成する
- ② 学内のイントラネットで公開し、学生が自由にアクセスできるようにする

☆低学力学生に対しては☆

自由にアクセスできるようにしても低学力学生は自ら見ない可能性大

- ・チェックシートを作りステップごとに視聴させる
- ・e-Learningシステムを活用して、学生の視聴をチェック
- ・ステップごとに口頭試問、小テスト、レポート等で理解度を個別にチェックし、確実に身につけさせる

### (2) モチベーション対策 ～臨床参加型実習の強化～

目的：高度な診療を自ら行う疑似体験を通して歯科医師になるモチベーションにする

計画：教員が見学用症例を準備し、予備知識をつけさせてから実際の見学に望ませる

#### <具体的応用法>

- ① エンド、ペリオ、修復、インプラント、義歯、矯正等複合的な処置が必要な症例を用意する。
- ② 学生に初診時の問診からリコールまでのながれの綿密な治療計画を立てさせる。
- ③ 教員がチェック
- ④ 診療を見学し、実際の治療計画と自分の計画との相違点を考え、なぜその様な治療の順番になるのか、どのように治療が進んでいるかなど、積極的に考えながら見学させる。
- ⑤ 見学終了後、教員と診療内容、治療計画についてディスカッションを行う。

### (3) モチベーション対策 ～卒業生の体験談～

目的：卒業生の体験談を聞くことにより、歯科医師という職業へのイメージを持たせる

計画：臨床現場で活躍する先生方の体験や考え方を学生に直接伝える

#### <具体的応用法>

- ① 臨床現場で活躍する先生方に講演をしてもらう
- ② 講演の時期は4月など、試験が忙しくない時期に行う

## 対策実現プログラム ～教員編～

### (1)教員教育

目的：教員の意識改革を通して教育力を上げる

計画：歯学部独自でFDを行う

<具体的応用法>

- ① 歯学部でFDを行い、教育における問題点・解決法などを話し合うことにより、教員の意識改革を促す
- ② 学生の教員評価の高い教員の講義を傍聴し、自らの講義にフィードバックする
- ③ 低学力学生の指導法や学生のメンタル面に対するケアの方法を学ぶ勉強会を開催する

### (2)教員評価法の改革

目的：教育を正當に評価することにより個々の教員の教育力を向上させる

計画：歯学部独自の教育評価の仕組みを作る

<具体的応用法>

- ① 教員の講義を他講座の教員が傍聴し、評価する
- ② 担任による個別指導の頻度・時間や補講の実施の有無などを評価する
- ③ 学生の授業評価だけでなく、総合学力試験の結果等を用いて、教員の教育の成果を判定し、教員評価の一つに加える
- ④ 教員評価委員会を立ち上げ、歯学部独自の教育評価の仕組みを作る

## C班（看護福祉学部看護学科）

### テーマ「学生が臨床実践能力をいかに身につけるか ～学生の到達度と科目間のリンケージ」

#### WS2 問題の確認と対策案

##### 1. 問題の焦点化

問題を焦点化するため、臨床実践能力のうちでも、バイタルサインズ（血圧）の測定に焦点をあてて、教育の現状と課題を明らかにすることにした。

##### 【問題の焦点化に向けた経緯】

今年度、看護学科FDを立ち上げ、全体FD研修までに2回開催し、課題について検討してきた。

第1回看護学科FD(6月14日開催、参加者22名)では、事前に看護学科会議で決定した「学生が臨床実践能力をいかに身につけるか」というテーマをもとに、現状の教育における課題について自由に討論した。その結果、まずは臨床実践能力の中でもバイタルサインズ(特に血圧)の測定に焦点を絞って、各教科目や専門領域ごとに講義・演習・実習のつながりや科目間のリンケージも含めて検討することになった。

続く第2回看護学科FD(7月26日開催、参加者26名)では、各専門領域から事前に提出された現状の教授内容や課題に関する資料に基づき、バイタルサイン(血圧)をめぐる教育の現状と課題に関する意見交換を行った。以上の事前準備をもとに、全体FD研修に臨んだ。

##### 2. 学生の看護技術における問題の明確化

現状：正確な血圧測定ができない

- ・適切な測定（いつ、どのようなタイミングで、どのような器具を用いるかの判断）ができるのが、実習での学習到達レベル→これ以前の“手技”自体が未熟
- ・学生の技術レベルの未熟さが、実習ではじめて露呈、患者にも負担をかける
- ・どのくらいの学生が未熟なレベルなのか教員が把握できていない

課題：(1)教育内容の科目間の共有を踏まえて、今後は、「学生はなぜわからないのか」「わかるためにどうしていったらよいか」検討していくことが必要ではないか。

(2)①知識を理解し、②技術を身につけ、③患者に対して技術を使って援助する、という3点に課題がある。臨床では、血圧を測定する必要性や意味を考え、アセスメントし技術を使って援助する過程において、特に指導が必要と考える。

(3)学生の既習の学習内容をどのように引き出し、どのようにつないでいくかが大事である。

(4)患者(対象)の特性や疾患の影響など各領域に特化した内容は学生にとって新たな学習として捉え、どこまでを到達目標とするかを併せて整理することが必要ではないか。

(5)学生が血圧測定技術を身につけるためには、学内で繰り返し継続していくことが重要であり、そのための時間や場の確保、学生の到達度の評価に関して、教員間で共有することが必要である。

課題（問題）のポイント：

- ① 臨床実習の場での血圧測定技術が未熟である
- ② 血圧測定技術の到達度を実習前に確認することができていない（カリキュラム化されていない）

3. 対策案⇒ワークショップ3

討論でのご意見：ワークショップ2での発表に対して、各学部から「学生の到達度を評価するためには、OSCEを用いるしかないのでは」との意見が出された。

WS3 対策と具体的実現プログラム

1. 看護学科における教育目標および卒業時の到達度の設定

現在、看護福祉学部の教育目標は設定されているが、看護学科の教育目標は見あたらないため、今後は以下の2点について検討していく必要がある。

- 1)各学年の教育目標を設定  
知識、技術、態度について具体的な目標を設定する
- 2)卒業時の看護技術の到達度を設定

2. OSCE(Objective Structured Clinical Examination;客観的臨床能力試験)導入の検討

1)導入検討組織の編成

学部長、学科長、教務部長、実習委員長、カリキュラム検討委員、FD委員 等

2)実施時期の検討(案)

- 第1回 基礎実習前 (2年次前期)
- 第2回 領域別実習前 (3年次前期)
- 第3回 卒業前

3)導入開始時期の検討

現在検討されているカリキュラム変更に掲載するとすると

平成23年7月 文科省へのカリキュラムの変更届

平成24年3月 実施準備(SPの募集と養成、状況設定、評価基準)

4)OSCE 導入に伴う予算

90万円(準備30万円、試験当日60万円)

参考) 本学における模擬患者(Simulated Patient :SP)謝金は、1人あたり1回3,000～5,000円

## D班（看護福祉学部臨床福祉学科）

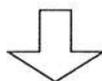
### テーマ「学生の生活・就学支援に向けて」

#### WS 2 問題確認と対策案

##### 1. 現状の問題点（欠席・遅刻の多い学生への支援に焦点を絞って）

###### 【学生の欠席・遅刻の要因】

- ・ アルバイト  
    【理由】 学費・生活費のため。学生の意識（学業よりもアルバイトを優先）。
- ・ 生活習慣のみだれ  
    食習慣・睡眠リズムのみだれ（特に一人暮らしの場合）。
- ・ メンタル面での問題を抱えている  
    本学新入学生を対象とした調査結果 → 約6割に抑うつ傾向がある



###### 【教員側の課題】

- ・ 欠席・遅刻が多い学生について、情報が少なく、断片的である。また、関係教員に周知されていない。
- ・ 学生個人の生活状況の把握が困難。

###### 【学生側の課題】

- ・ 生活習慣と健康との因果関係についての知識が不足している。

##### 2. 対策案

###### (ア) 欠席・遅刻が多い学生の実態を把握するための現行システムの見直し・構築

- ① 学生個々人の生活実態の把握（担任の面談、面談に来ない学生への対応）
- ② 学科内での学生情報の共有化（迅速な情報伝達、学生の合意をとる等の配慮）
- ③ 蓄積された情報の保管・活用（担任変更時の申し送り・連携等を含む）
- ④ 学生の実態について教員が共通認識をもつ（新入生の抑うつ傾向の実態等）

###### (イ) 正しい生活習慣を身につけさせる

- ① 朝食を摂る生活の習慣化（例：朝食券の配布、朝食の大切さが書かれたリーフレットの配布等）。
- ② （特に一人暮らしの）学生の生活習慣について、保護者が関心をもち、関わってくれるような情報提供を行う。

### WS3 「学生の生活・就学支援に向けて」のプログラム

#### ◎プログラムの主旨

WS3では、WS2で教員側と学生側の課題から対策案として出された実現可能な(A)についてのプランを取り上げた。担任教員と教科担当教員による多面的に学生状況を把握して、早期に対応するシステムのプランを作成する。

尚、対策案(イ)の①については、今後も情報収集を継続し、検討課題とした。

#### 【実現プラン】

#### 1. 「いきいきポートフォリオー自己成長を促すために！ー」の作成

##### ①学生と担任教員との個別面談

- ・主に学生生活についての話しを聞き、問題の早期把握に努める
- ・4月は週1回(学生は環境変化による生活へのリスクが高いため)
- ・4月以外は月1回程度(学生の状況に応じ随時面談)

##### ②学生の情報管理(データベース化)

- ・歯学部で実施している先行資料(ポートフォリオ)を参考とする \*予算は0円

##### ③学科内FD委員会の設置

- ・「いきいきポートフォリオ」の作成を中心にした委員会を立ち上げる
- ・委員構成:教務委員, 学生委員, メディア委員, 保健管理センター運営委員, 基礎科学教員(担任)など

##### ④蓄積する情報の内容

- ・学習の成果や取り組み
- ・生活習慣
- ・健康状態 など

##### ⑤個人情報の観点から、法的な領域を逸脱しない範囲の情報

##### ⑥あくまでも学生の任意であり、情報管理の際は学生との合意が基本

#### 2. 「臨床福祉導入演習」科目の開始時期の見直し

- ①1学年後期開催 → 1学年前期開催
- ②少人数制での担当教員による個別指導(個別面談含む)の実施

#### 3. 実施時期

平成23年4月

## E班（心理科学部臨床心理学科、言語聴覚療法学科）

### テーマ「学生の学力の多様化とカリキュラムの実質化に向けて」

#### 臨床心理学科

#### WS 2・3 問題確認と対策案、対策と具体的実現プログラム

##### （1）問題の確認

##### 学力の多様化

- ①学力のばらつき
- ②学習能力のばらつき
- ③学習意欲のなさ

①全般的な低学力化だけではなく、低学力者の増加に伴って、学力のばらつきが大きくなっている。全員が一律に低下しているのであれば学習の指導方法も一律に変えることができるが、教える内容を平易にすることは上位の学生の不満を高めることになっており、現状でもそのような不満をよく耳にする。

②学習能力のばらつきは、さらに細分化でき、

イ 学習習慣、スキルが身につけていない

ロ 劣等感を持っている

ハ 軽度の発達障害

ニ 心の問題を抱えている、

などがある。たとえば質問をすることができない学生が多いが、これも学習スキルのなさともみなすことができる。また、簡単な計算ができなかったり、簡単な英語のスペリングを知らないというような場合は発達障害も視野に入れての指導が求められる。

##### ③学習意欲のなさ

本学では資格の取得が前提となっている学科が多いが、資格の取得と職業像、キャリア意識が結びついていないことも多い。

##### （2）これまでの取り組み

1, 2年次からのキャリア教育の導入（臨床心理学科）

1年「フレッシュャーズ講座」、2年「キャリアプランニング」

本学科へ入学後のキャリア意識の形成・発達させ、2年の終わりまでにこれを

明確化できるようにする

講義内容を自身の可能性と結びつける

得意なことの多面的な見方～人生期待＝キャリア意識

入学から卒業までの学生生活の見通しを立てる（書き込む）

授業科目に限らず、各自の得意なこと、関心、目標等を記述～自己肯定感：  
自分を活かす

各受講科目への受講前の期待と受講後得られたことの記述

記述内容は学年担任（1年生は9：1で配置）が確認をする

肯定的自己意識の再生・再構成，支援が必要な学生の早期把握を目指しているが，評価はまだである．

### （3）対策，提案

#### ①教員の数を増やす

個別指導を充実されるには教員の数に限界がある．TAを活用しても，教えるスキルや知識があるわけではない．比較的学力の備わった学生への指導が不十分になっているため，全体としての学生の満足感が低下している恐れがあり，学力の低い学生への指導だけではなく，全員へ個別指導を充実させる必要があり，このためには教員が少ないのが現状である．

#### ②E-learning の活用

薬学部ではCBTが導入されているが，E-learning の積極的な利用によって①をある程度補うことができる．他大学ではE-learning で指導する人員として事務職員を活用している事例があり，このようなことも検討されるべきである．

#### ③入学してくる学生の質を揃えるための入学試験の改善．

単にレベルを上げる，維持するだけではなく，同じ学力でもその後よい学生生活ができる者を取捨選択する．これには追跡調査も必要である．

# 言語聴覚療法学科

## WS2 問題確認と対策案

近年、本学の言語聴覚療法学科の学力は正規分布を示さず、2峰化を示していると言える。これについては、学力や学習の定義は様々であることは認識した上で議論を行う必要があるが、ここでは狭義の意味で机上の勉強いわゆる試験の成績という意味で述べている。これまで2峰化のうち低い位置にいる学生に対する手当として、スムーズな大学教育への移行を行うため低学年のうちに文章指導を行うこと、また講義中に小テストを多く取り入れるなど学習の姿勢づくりに取り組んでいるところである。

しかし、専門職業人を育成するという観点からは、試験の成績のみを上げるような教育は将来あまり意味をなさないと考えられ、学生自らが自己学習や他者との相互交渉を行っていきける学習環境づくりが必要である。そのためには、カリキュラムの改訂を含めて議論していく必要があり、その基本的考え方について以下に示したい。



・臨床実習 ・国家試験
・能力別演習の促進
・外部 (supervisor) の意見を取り入れたカリキュラム改訂 ・early clinical exposure ・様々な領域で活躍しているST像の紹介： 教員以外のSTの講義⇒システム化・カリキュラム化 ・大学病院言語聴覚治療室の有効活用

## WS3 対策の具体的プログラム

(入学者の選抜に関して)

### 1. A0入試の検討：利点もあるがリスクもある

- ・A0入試は、高校の進路指導で受験対策的なことが行われ、本来の学生の意欲や考え方などの本質と違った点を評価する危険もある。廃止を含めた検討をしていく必要がある。

実現に向けての課題：

- ・大学の経営や適性ある人材の選抜の観点からは多様な考え方がある。

(入学後のカリキュラムの改革に関して)

### 2. 多様なST像の紹介・提示：

- ・臨床現場では様々な領域で活躍しているSTがおり、一口にSTといっても多くの考え方を持っており多種多様である。大学以外で活躍する臨床現場のSTの講義を取り入れることが必要。
- ・臨床実習で躓く学生の中には、担当したスーパーバイザーとの人間関係に悩みドロップアウトしてしまう学生も少なくない。その意味からも多様なST像を低学年のうちから知ることが重要である。
- ・システム化し、カリキュラムに組み込む。

実現に向けての課題：

- ・大学以外で実際に臨床を行っているSTは多忙であり、どの程度実現可能か？
- ・外部から講師を招くには相応の人件費が必要であり、大学の経営と長期的な効果について予測していく必要がある。

### 3. 医療大病院ST室の有効活用：

- ・大学病院における臨床実習は、経費・人材など総合的なコストパフォーマンスを考えても有効な場である。しかし、大学教育の中で実際に目にするのは4年生の基礎実習が初めてということがほとんどである。低学年のうちから、病院でSTや患者様に触れていくことは、モチベーションを向上させるのには非常に重要である。
- ・病院の診療体制として失語症を含む高次機能障害・成人の嚥下障害の患者様に触れる機会が少ない。
- ・近年、入学者数が増加していることから、設備・人材数などハード面の整備も必要である。

実現に向けての課題：

- ・病院の診療体制として失語症を含む高次機能障害・成人の嚥下障害の患者様

に触れる機会が少ない。

・近年、入学者数が増加していることから、設備・人材数などハード面の整備も必要である。これらについては、大学経営・病院経営との観点から中長期的な試みと言えるが、見学を希望する学生が増加するよう、教員が学生へのアナウンスを積極的に行うことは早期に取り組めることである。

#### 5. Early Clinical Exposure :

・STのみではなく、PT・OTなどの他職種についても知る。⇒リハビリテーション科を設置する病院などでの体験。

・現場の先輩たちの臨床に低学年のうちに触れることで、臨床の「こころ」を知る契機になり、学生のモチベーションを高めることにつながる。しかし、現場に触れモチベーションが下がることも予測される。これについては、学生自身のある程度の覚悟を決めることにもつながり、例えモチベーションが下がったとしてもあるいは進路変更を考えるような事態にいたっても、高学年になって臨床実習で躓いてしまうよりはプラスの面が大きいと考えられる。

実現に向けての：

- ・本学以外の施設で行う場合、受け入れ施設を見つける必要がある。
- ・札幌医科大学などと連携できないか？
- ・進路変更に伴う弊害とは何か？大学の経営か？学生の利益または不利益か？

#### 6. 能力別演習の促進：

・成績順のグループ編成により、学内における基礎実習では、学生のアンケートなども合わせても、他者との相互交渉による学習効果がみられている。

・その他の演習科目についても、学習目標に合わせたグループ編成を取り入れていくことで、理解度または創造性の向上につながると考えられる。

実現に向けての課題：

- ・学生の選別につながるという意見も予想される。
- ・学生のモチベーションを下げる結果にならないか？⇒日本の文化的背景も考慮に入れ検討。

#### 7. カリキュラム改定：

・学内の教員による検討だけではなく、実習先のバイザーの意見を取り入れながらカリキュラム改訂に望む必要がある。それにより、現場の視点を学生のうちから学んでいける基盤を作りあげていく。

言語聴覚療法学科は新カリキュラム移行のために、9月に学科FDを実施し、平成24年から新カリキュラムに移行する予定である。
--

---

## 参加代表者感想

## 学生の学力向上を目指した薬剤師養成教育の実践

薬学部 小田和明 (A班)

我々はまず、WS 2において薬学部学生の学力の問題点について分析を行った上で対応策のポイントをまとめた。また、WS 3においては、WS 2での分析・検討をふまえて、より具体的な対応策を「個体差教育（オーダーメイド教育）の実践」という観点から考察した。

このように、学生の問題点と対応策を立体的に把握し、具体的な方策をも考察しようという試みは、学生の学力など薬学教育の問題点を多元的に理解し解決するために非常に有効な視座を提供するものである。すなわち、今回の試みで最も重視されたことは、学生の個性に着目し、具体策を考えたことである。たとえば、学力が不十分な学生に対する十分な補正教育の確保、逆に高い能力を有する学生に対しては、一層のやる気を起こさせ能力を伸ばす方策の検討などである。

我々は、このような個々の学生に着目した教育を「個体差教育（オーダーメイド教育）」と規定した。この個体差教育の充実は、本学の置かれている状況に適切に対処し、新たなブレークスルーを生み出す出発点になると確信している。なぜなら、今日、様々なレベルの学生が様々なニーズをもって大学に入学してきている。このような現状に対処するには、各学生の個々の学力や個性、志向などを把握し、それぞれ対処することが最善と考えるからである。このような意味で、我々の議論は、現状把握と問題解決のために、示唆に富んだ意義深い議論を展開できたのではないかと考えている。

## 平成 22 年度 FD 研修に参加して

歯学部 藤田真理 (B班)

今回の FD 研修において歯学部班に与えられたテーマは「低学力学生の選定と具体的授業方法について」であり、本課題を明確にするため「低学力学生が増加する原因」「それらに対する具体的対策案」について検討をおこなった。

「低学力学生が増加する原因」として、モチベーションの低下、各学年における進級判定の基準の低さに加え、国試・卒試の出題形式に則した不適切な勉強法ならびに臨床実地対策の難しさなどがあげられたが、今回の WS では主に 6 年生ならびに卒延生を対象として現在 OSCE 対策として準備されている Video 教材を適切に応用することで臨床実習からの空白期間を補足し、モチベーションの向上を図るという臨床実地対策における具体的解決案が提案された。また、全体的な低学力学生への対策として各学年における進級判定の見直しに加えて、全員進級を目標とした低学力学生に対する適切な補習システムの充実を図ることが必要であり、学内マンパワーの効果的活用ならびに教員教育の充実など、教員側の努力も必要であると再認識した。

## 感想

看護福祉学部 伊藤道子 (C班)

看護学科 (C グループ) のテーマは、「学生が臨床実践能力をいかに身につけるかー学生の到達度と科目間のリンケージ」でした。事前準備として看護学科 FD を2回開催し、教育の現状と課題について検討したことは、それまで学科会議以外では特定の問題解決に向けて、個々の専門分野の教員が一堂に会して意見交換する場がほとんどなかったため、教員間の連携を意識する非常に有意義な時間だったと感じています。

WS2 では、臨床実践能力をバイタルサインズ (血圧) の測定に絞り込み、問題の明確化と対策を検討しました。臨地実習で受け持ち対象者の血圧を正確に測定できない学生がいるが、各学生の血圧測定技術は実践能力到達度の形成的評価として実習直前に確認しておらず、どの位の人数の学生がこれに該当するのかが教員側で把握されていないことが明確になりました。他学部の教員から、OSCE の導入がその解決策になるのではないかと意見が出され、グループメンバーもその必要性を理解し、WS3 では OSCE 導入を志向した計画を立案しました。その後の情報交換会では、心理科学部と歯学部の先生方より、OSCE の課題開発の重要性と試験時間の設計、模擬患者、評価者等について、多面的なアドバイスをいただき深く感謝申し上げます。

看護実践能力を評価する方法として OSCE を導入している看護系大学は極めて少なく、実現に至るまでの道のりはかなり険しいでしょうが、WS で明確になった課題解決に向かって、現状からほんの少しでも、しかし着実に進展させたいと認識しました。

## 「FD 研修の感想」

看護福祉学部 池森康裕 (D班)

「多様な資質を持つ学生に対応できる効果的な教育方法」をテーマに FD 研修へ参加した。少子化による受験生の減少は、一定の学力を保つことが難しく、さらに学習障害や精神疾患の疑いがある学生が、学部に関係なく入学している現状があった。

国家試験の合格率が、大学経営に大きく影響する我が校においては、学生の生活状況と個々の資質を正しく理解し、学習意欲を高める適切な教育指導体制が求められている。しかし、学生個人の情報は、個人情報保護の観点から、全教員に周知徹底することは困難な状況にあり、限られた教員 (ゼミや担任) によって、学生指導が行われてきたように思う。

今後、多様な資質を持つ学生に対応するためには、教員一人一人が障害や疾患の知識を深め、学生との良好な関係作りが必要である。法律の壁に手を拱いているのではなく、学生個人の了解を得ながら、目標達成に向けて、学生と全教職員が共に歩む姿勢が大切であると感じる研修であった。

## グループ代表感想

心理科学部 小林健史 (E班)

本年4月に採用となり、新人FD研修を経て4ヶ月が過ぎ、今回の全学FD研修への参加を命ぜられた。3月まで臨床一本で勝負してきた自身にとっては、この4ヶ月間の経験は大きなカルチャーショックを受けたように思うが、別の視点で社会をみるという点で大きな収穫を得ている気がする。

今回の全学FDで、心理科学部として臨床心理学科とともに共通して与えられた課題は、学力の多様化に対する学部としての対応に関する検討であるが、理想を追い求めようとする、コストの問題が生じてしまい中々議論が前に進まないのが現状である。しかし、今回のFD研修で得られたものはSTになりたいと願って入学してくる学生にどのような形で、この仕事に興味を持ってもらうか?という議論につきたように思われる。このような、熱い議論を今後も続けながら、実現に向けて自分には何が出来るが日々模索していくことが、教員に課せられた使命だと痛感している。

## F D 委員感想

## FD 研修（テーマ編）に参加して

薬学部 平藤雅彦（FD 委員）

全学のFD研修への参加はこれで2回目であり、前回は本学赴任直後に一参加教員として、今回はFD委員としての参加であった。今回はFD委員会新委員長の新しい方針の元に行われた最初のFD研修であり、各学部の抱える学力関連問題とそれに対する具体的解決策を全学部からの参加者で共有するという趣旨で行われた。大学を取り巻く状況が急速に変化し厳しさを増してきた今、各学部でもそういった現状の具体的対応策が緊急の課題となっていると感じられる。今回の研修は1日で行われたが、そのような危機感が背景にあるためか時間が足りないと感じるほど密度の高い効率的な研修であった。他学部の現状や対応策からは多いに参考になる情報が得られ、その後の情報交換会も大変有意義なものであった。薬学部は独自にFD委員会を設置し活動しており、その全委員が今回のFD研修に参加している。「FD活動の実質化」が云われているが、こういった連携を活かして今回のプロダクトの実質化を進めて行ければと考えている。

## 平成22年度FD研修に参加して

薬学部 齊藤浩司（FD委員）

8月10日に札幌サテライトキャンパスで開催された平成22年度FD研修に、昨年に続いてFD委員として参加しました。国永委員長を中心に、FD委員会ならびにワーキンググループで議論を重ねて準備が進められたことにより、内容の充実したFD研修になったと思われます。特に、学部学科毎に喫緊の課題を個別テーマとして取り上げ、その対応策を検討したWS2とWS3は大変有意義でした。薬学部では、「学生の学力向上を目指した薬剤師養成教育の実践」がテーマでしたが、今回は薬学部FD委員や教務委員が参加したことから、実現性の高い対策がまとめられました。各グループで検討された課題はいずれも他の学部学科にも共通するものであり、プロダクト発表時の全体討論や終了後の情報交換会でも活発な意見交換が行われる材料になったと思われます。例年2日間行われてきたFD研修でしたが、1日でも実りある成果が得られることが示され、次年度以降のFD研修に大いに参考になったと思われます。

## FD 研修感想

FD 委員 久保勘二

平成 19 年度 FD 研修には参加者として参加したが、今回の FD 研修は、FD 委員として初参加した。FD 委員として、タイムマネージャーや情報交換会司会など精一杯役割を果たした。今回の研修はこれまでとは異なり、研修期間は 2 日から 1 日になり、各学部ボトムアップの課題に対して、学部・学科単位でグループ作業を行い、具体的に実現できるプロダクトを作成することから、無駄のない非常に有意義な FD 研修であった。

今年から、FD 委員もグループ員の一人として作業に加わることになったが、歯学部の「卒延者」に関する課題は、人間基礎科学分野に所属する准教授としては未知の課題であったが、歯学部の専門の先生方の活発なグループ作業・討論により、無事、グループ発表がおこなわれた。また、情報交換会は、学部や役職にとらわれず自由に歓談され、活発で有意義な FD 研修であったと感じた。

## FD 研修感想

看護福祉学部 山田律子

第 1 回 FD 委員会での国永委員長の「今年度はボトムアップ形式により、各学部学科で課題を出して深めていく本来の FD 研修にしたい」というご提案をもとに、看護学科 FD を立ち上げた。FD 研修までに 2 回開催し、看護学科のテーマを「学生が臨床実践能力をいかに身につけるか：学生の到達度と科目間のリンケージ」と決め、教育の現状と課題について討論するところまでを事前に行った。

FD 研修の WS2 では、事前準備資料をもとに現状の課題を整理して発表したところ、各学部から OSCE 導入の必要性について意見をいただいた。そこで、WS3 では、学年別目標設定の必要性はじめ、OSCE 導入に向けた組織編成と方法、スケジュール案など具体的方策を練ることができた。なお、学部学科別 WS の時間(各 50 分)は短く、もう少し時間があると、なお良かった。

続く情報交換会でも、先に OSCE を導入された心理学部(木下憲治先生)や歯学部(越野寿先生や越智守生先生)から具体的な話を伺うことができ、有意義な時間となった。

今回、他学部から多くの貴重な意見もいただくことができ、医療系総合大学である本学だからこそ可能にした意義深い FD 研修だったと感じた。

第 3 回看護学科 FD を 9 月に予定している。今回の FD 研修を通して、課題解決の方策が示されたため、今後は実施に向けて取り組みたいと考えている。

## FD研修感想

看護福祉学部 志渡晃一 (FD委員)

今回FD委員(タスクフォース)として参加させていただきました。国永新委員長の下、無事に研修を終えることができ、ほっとしております。

FD研修は学部横断的に交流が持てる点が素晴らしいと思います。他学部の先生と関わる機会は自らのアカデミックキャリアを向上させる上でも非常に有意義と感じました。特に学部ごとの事情に合わせたテーマ設定は意義深く有益であったと思いました。全体として和やかな温かい研修会になったことを委員の一人として喜びたく存じます。

今回のFDの改善点として、アイスブレイクの時間を長めにとることが必要かと考えました。また、質疑応答の時間が短いことも気になりました。それ以外はおおむね順調な運びであったと思います。今後ともFDを継続発展させていくべきであると再確認した次第です。

## FD研修感想

看護福祉学部 小澤次郎 (FD委員)

新しい体制となって第一回目の夏期FD研修が無事に済み、FD委員としてほっとしました。参加された大野副学長をはじめ、教員のみなさん、事務のみなさんに謝意を表します。今回は実行可能な案を、各学部各学科からボトムアップで提示して議論をするという方針が奏功し、いつになく活発で有益な議論がありました。他学部や他学科の現在の事情がうかがえただけでなく、タテ割りの各部局固有の問題点が、横の組織連携で効率的に解消できる見通しが発見できたりして、それなりに成果を得たようです。

《努力する限り、人は迷う》とはゲーテのことばですが、これからは実行に移すという重要な仕事があります。教育の議論や分析、その成果の蓄積や教育情報の有効なシステムの活用や開発も不十分です。学士教育の査定と、教員の評価にともなう問題も、相互の信頼をふくめて再検討が必要でしょう。本学の存在意義が厳しく問われることになったようです。

## FD研修感想

心理科学部 中野茂 (FD 委員)

今回のFD研修会のテーマは「多様な学生への対応」、直截に言えば、学生の低学力対策であった。このことは、「大学とは入試によって選抜した学生の高等教育機関だ」という思い込みから脱却しなければならないという現実ではあるが、全入時代という用語を受け容れ、その結果、低学力対策を講じなければならないことに自己矛盾を覚えざるを得なかった。果たして、高校までに築かれた学力水準を大学の専門教育で向上できるのだろうか。

ところで、8月27日の朝日新聞に「変われ高校生一心のスイッチ入れる方法」という社説が載っていた。それによれば、最近のある調査から、高校生の3人に2人が「自分はダメな人間だ」と感じていること、学生ボランティアとの対話という「ナナメの関係」によって「自分にもできるかも」と思い始めることが紹介されていた。ひょっとすると、低学力対策の前に、このような「自己肯定感」の涵養が必要なのかも知れないと考えさせられた。

## FD研修感想

心理科学部 松本由起子 (FD 委員)

午後の各学部の取り組みについての発表はおもしろく有益だった。発表や質疑応答がもっと長く、もっと詳しい話が聞けたらと思った。たとえば「卒延」という制度が存在することをわたしはこれまで知らなかったが、知れば、そこに学生が行きついてしまう経路をめぐって、低学力化にかんする視点がひとつ増える。卒延者数の推移やその原因、対策など、詳細に聞きたかった。学力低下がどういう状況にあって、どういう事態を招くのか、制度にかかわるかたちで考えるうえで有効な事例のように思えたからだ。他所の状況を知って自分の周囲が見えてくるのは、個々の方策やその成否をある程度詳細に知ってこそで、逆に、学部にも所属し専門化された教育をしていて普段情報を共有していない教員が、年に一回といった頻度で集まって、短時間で大局的な話をしようしても、実のある話にまで辿り着かないだろうという感想を抱いた。(心理科学部・臨床心理学科・松本)

## FD 研修の感想

心理科学部 木下憲治 (FD 委員)

今年が、教員として、また FD 委員として北海道医療大学 FD 研修会の初めての参加でした。初めての参加でしたが、研修会当日の WS2 の司会も担当することになり、司会者特権で、他学部・学科の取組みについて私の疑問を直接聞くことができ大変参考になりました。また、看護学科の諸先生にはカリキュラムへの OSCE 導入を司会者が作り上げてしまい、この場を借りてお詫び申し上げます。今回のテーマに関して、事前に学部・学科内で話し合うことになっていたため、学科内で参加教員と話し合いを持つことにより学科での学生教育の問題点を整理でき、学科教育の方向性を示すことができ FD 研修後の実質化に向けて参考になりました。懇親会では他学部の先生と FD 研修会の話ばかりではなく、教育・研究などの話にも発展し、現在あるいは過去に人的なつながりがあったことも判明し盛りあがりました。自分自身が development できた 1 日でした。今回の日程は心理科学部では試験日程と重なってしまったことは残念でした。

## FD 研修感想

歯科衛生士専門学校 大山静江

今回、FD 委員として初の研修参加であった。平成 20 年度に一度、参加させていただいたが、その時の資料を見ると FD 委員の先生方においてはタスクホースという役割であった。今年度の資料によるとタスクホースという名称は用いず、あくまでも FD 委員、括りとしては世話役と記されていた。はたしてお世話をすることができたか？と自問自答してもあまり役には立っていなかったが、見て学ぶことも学習の一つであると思うので、今年度の目標は「見て学ぶ」ということにしておこうと自分なりに決着した。委員としては来年への傾向と対策が若干ではあるが構築できたのではないかと思う

午前中の WS においては「学生の多様な資質の現状把握と大学全体の取り組み」～コミュニケーション能力という視点から～という内容で各学部および専門学校での学生の現状や課題、それに対してどのようにしていけばよいかなど短時間ではあるがコンパクトに話合われた。午後の「学部学科の個別テーマ」では残念ながら歯科衛生士専門学校の教員数が不足し WS が成立しない為、歯学部の WS に参加させていただいた。中でも普段触れることができない歯学部の現状や先生方の情熱を感じることができ個人的には成果を得た。ここで得られた学ぶべき点は専門学校にて報告した。

最後に、FD 研修をとおして一番感心させられたのは、教員の能力の高さである。限られた短い時間の中で与えられた課題を話し合い、まとめ、他者に伝えるということをしてどのグループも行っていった。単に目標を到達するだけの研修ではなく、教員の能力を引き出す意義のある研修会なのだと感じた。

## FD研修感想

大学教育開発センター 千葉芳広 (FD 委員)

今年度のFD研修テーマ編は、各学部が抱える課題と対策を学部ごとに組織された参加者のあいだで議論するという、例年にない試みであった。看護学科のグループにオブザーバー的に参加したWGでは、採血に関する臨床教育を如何に充実させるかという課題を議論した。専門科目の教育を全学FD研修の俎上に載せたのは、初めての試みではなかったかと思う。全学FDでは、全学的に共通行動を取りやすい入学前教育や導入教育を取り上げがちであるが、専門教育も課題に取り上げることで、専門教育担当教員もFD活動に参加しやすくなるし、各学部FDの学部の垣根を越えた活動の展望も開けてくるのではないか。

今回の全学FD研修が、各学部FD活動を日常的に活発化させる役割を担ったという評価の与えられることを期待したい。そのためにも、学部FD活動に関する情報を全学的に共有することが重要である。FDニュースレターやインターネット媒体を活用することも、可能ではないか。

## FD研修・感想

大学教育開発センター 花渕馨也 (FD 委員)

今年度のFD研修では、従来のFD研修のやり方から大きく二つの点で変更を行った。一つは、これまで過度に詰まったスケジュールが生まれ、疲労がたまる一方で、ワークショップでの議論が十分に消化し切れないという反省を受け、日程を1日に短縮し、少し余裕をもったスケジュールを組むこととなった。時間を短縮した代わりに、ワークショップでの議論の内容を濃いものにするために、準備期間においてあらかじめ参加者が問題意識を共有し、それぞれのアイデアをまとめてから議論に参加できるように工夫を行った。

第二の変更点は、ワークショップを学部学科単位で行ったということである。これは、FD活動を、これまでのトップダウン的なやり方からボトムアップ的な活動へと転換するという、新しいFD委員会の方針に基くものである。それにより、今回のFD研修は、教育現場において問題意識を共有するメンバーが、日常の業務ではなかなか話し合うことができない教育問題について集中的に議論し、その議論の内容を実施する体制にまで持っていくことを目的として企画された。また、各学部学科のそれぞれの取り組みをお互いに情報として共有し、相互に知恵を出し合うことも研修のもう一つの目的であった。

結果として、これら二つの変更により、FD研修ではかつてないほどに集中した内容の濃い議論が展開され、それぞれの学部学科において新しい教育の取り組みへの道が開かれたと思われる。

## FD 研修感想

大学教育開発センター 国永史朗 (FD 委員)

今回で本学の FD 研修は 9 回目となりました。そのうち計 5 回参加しました。参加教員の一人として、また FD 委員としての出席でした。今回は、ディレクター・FD 委員長としての初めての FD でありました。開催まで準備のために多くの時間を費やしてきました。FD 委員や参加教員の皆様の協力を得て、何とか無事に研修を終えることができました。あらためてお礼を申し上げます。

FD 研修では、参加教員のエネルギーにいつも圧倒されます。普段あまり見ることのできない活動的な姿に驚かされます。今回も、熱意のこもった教員の姿が研修の場にありました。周囲の人たちに影響を与え、心を動かしていく力、そんな教員の強い「感化力」に触れることができました。

大学での学びのうえで、最も重要なのは「大学入学直後の教育」であるといわれています。次いで、「大学の専門教育」などです。早い時期に適切な教育を行い、やる気を起こさせることが重要であることを示しています。今回の FD の WS1, 「学力」の視点から見た学生の現状把握の議論でも、常にあげられていた言葉が学生のモチベーションでした。入学後の早い時期に、学生にしっかりと学習意欲を喚起するには、教員の大きなエネルギーが必要です。感化力も必要です。その際、その力は組織的に注がれることがポイントです。教員の人間としての感化力は、教育システムがなくても、学生に対して発揮することができるでしょう。しかし、教育システムは教員の感化力なくしては、その機能を果たしえません。これからの教育においても、研修でみられた教員の溢れるエネルギーが注がれ、学生の心を動かしていただけるものと確信しております。

## アンケート集計

平成22年度北海道医療大学FD研修<テーマ編>参加者アンケート

今回のワークショップについて次の項目にお答え願います。

1. 今回のFD研修について

- 1) 日程           ・良かった           ・適当           ・悪かった

- 2) 時間配分       ・良かった           ・適当           ・悪かった

2. 全体のワークショップについて

- ・良かった           ・適当           ・悪かった

3. 学部・学科別のワークショップについて

- ・良かった           ・適当           ・悪かった

4. 今回のFD研修で良かった点、興味を持った点、改善点などをお聞かせください。

5. 今後のFD研修に向けて、取り上げるべきテーマなどについてご提案をお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

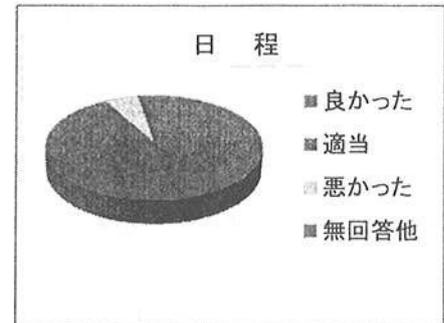
## 集計結果

## 1 今回のFD研修について

1)	日程	良かった	14
		適当	20
		悪かった	2
		無回答他	1

## &lt;意見等&gt;

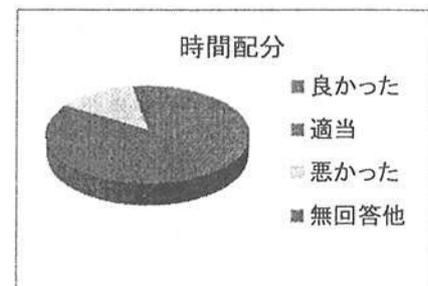
- ・期間等は良いが、実施時期をもう少し早い時期にしたほうが良い。  
・試験期間と重複した(心理学部)
- ・夏休み中の高校訪問、実務実習があり多忙期なので考慮してほしい。



2)	時間配分	良かった	14
		適当	17
		悪かった	5
		無回答他	1

## &lt;意見等&gt;

- ・1日の短縮型が大変良い。
- ・各WSでの全体討論は、テーマがまちまちなので今回不要だった。
- ・短時間で集中できた。
- ・若干討論時間が短い。
- ・事前に話し合いをしたので、研修時間内でまとめることができた。
- ・WS1が短かった。
- ・1日で終わられるのでよかった。
- ・WSの時間が短かった。
- ・休憩時間が足りない。
- ・午前がむだであった。
- ・前回参加よりコンパクトで集中できた。

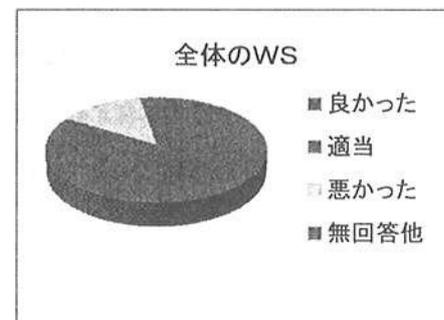


## 2 全体のワークショップについて

	良かった	10
	適当	21
	悪かった	5
	無回答他	1

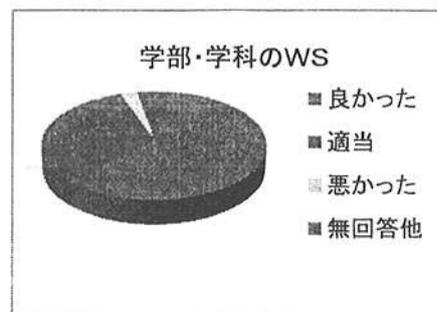
## &lt;意見等&gt;

- ・隣りのWSがうるさかったので、STの間隔を広くしてほしい。
- ・他学部の教員と交流し意見交換ができて良かった。
- ・テーマが難しく、なかなかまとまらなかったのも、もう少し絞ったテーマが良い。
- ・WSが3つは多すぎる。
- ・興味深いテーマだが役に立つとは思わなかった。
- ・各学部の現状と問題点が判り、共通するものと特異とするものを認識した。
- ・全体ワークショップで良いアイデアも聴くことができた。
- ・話の深まりがなかった。
- ・討議の時間不足。
- ・最初の講演とWSのつながりがない。



### 3 学部・学科のワークショップについて

良かった	23
適当	12
悪かった	1
無回答他	1



#### <意見等>

- ・学部内の意見も充実していたが、他学部の状態など知ることができて良かった。
- ・事前に問題を明確にしたので具体策を立案できこれからにつながる研修だった。
- ・学部内の意見交換ができ有意義だった。
- ・事前に学科でFDを行ったことがつながった。
- ・時間配分は悪くはないが作業時間が足りない。
- ・具体的な解決策を検討できた。
- ・他学部の教員のコメントがとても参考になった。
- ・それぞれの学部の問題点が把握できた。
- ・ボトムアップで問題点を提示する機会であった。
- ・心理科学部も学科別に行うべきだ。

### 4 今回のFD研修で良かった点、興味を持った点、改善点をお聞かせください。

#### <意見等>

- ・プロダクトが具体性をもっていたのがよい。
- ・学部別にグループ討論することは、共通意識が高いので良い。
- ・学部内のFD研修が必要である、
- ・学部別の話し合いをもて、他学部と情報を共有できたことがよい。(複数意見)
- ・アウトプットとして、十分な時間をかけたものがだせるような時間がない点が少し不満であった。
- ・1日の研修としては、中身の濃い内容であったと思う。
- ・多様な教員が集まったので、いろいろな意見やアイデアが聞けて参考になった。
- ・WS後に席を戻してプレゼンテーションを行うより、そのままの状態でもよかった。
- ・実現可能性のある内容になってきた。特に学部別テーマについて取り組むことができた点継続的に検討していくことができると思う。また、他学部からの情報も得ることができた。(複数意見)
- ・開催時期の8月については、有休を取る教員もいるので、別な時期の開催でもよい。
- ・学部内で教育について話し合う機会がすくないので、よい研修であった。(複数意見)
- ・事前に話し合い(情報収集・資料収集)をしていたので、短い時間でもまとめられた。(複数意見)
- ・wsの机の配置を工夫した方がよい。(隣の声がうるさかった。)
- ・教員の職位などに関係なく発言ができてよかった。
- ・午前中のWSは必要がないので、プロダクトにもう少し議論する時間をとった方がよい。
- ・若手や科目担当者のFDは別に実施すべきと思う。
- ・学部間で協力し合える環境を整備したほうがよい。

### 5 今後のFD研修に向けて、取り上げるべきテーマなどについてご提案をお書きください。

#### <意見等>

- ・「入学者を増加させるしくみ」(複数意見)
- ・「学生のモチベーションを上げるしくみ」
- ・「学生にとって魅力ある大学像を形成するには・・・。」
- ・「学生生活にどこまで関与できるか。」
- ・「問題のある授業の改善」
- ・「初年次教育について」
- ・「データ管理のガイドライン」
- ・助教や講師だけのFD研修の開催(複数意見)
- ・前年度のFDプロダクトの成果報告や具体案を実行した結果の検証(複数意見)
- ・教育力向上のための具体的な検討(複数意見)
- ・多様な学生に対する取り組み
- ・授業評価の高い教員から授業の工夫について聞きたい。
- ・今回のテーマを別な教員で数年続けたほうがよい。
- ・成績不振の学生に教育する側の意識向上
- ・講義室や自習室などのキャンパス整備の充実

## 当日資料

平成 22 年 8 月 10 日  
北海道医療大学 FD

資料 1

## ワークショップ (WS) とは

### 1. ワークショップとは

あらかじめ目標を定め、その達成のために参加者全員が有効な討論を行い、一定の時間内に実現性のある成果 (product) を出す体験学習である。

この方法によって個人レベルで問題解決を行うのとは比較にならない成果を得ることができる。

### 2. ワークショップの設営

(1) 目的：①全般的・研修的なものと、②個別の問題 (事項) 解決を目的としたものに大別される。

(2) 期間ならびに場所：2～3週間の長いものから、半日くらいの短いものまでであるが、機関単位のものでは1泊2日～2泊3日、全国レベルの場合数日が一般的である。

日常活動の場からかなり離れ (参加者が電話などの呼び出しで、妨害されず、作業に専念できること)、かつワークショップ環境として整った場所 (小グループにわかれ作業し、また、全体集会もできること) が望ましい。

(3) 参加者：異質の活動領域を持つ人で構成する。異質な活動領域を持つメンバーでは、多面的な検討が可能となり、よりよい産物を生み出すことが期待できる。

ディレクター、グループメンバー、タスクフォース、コンサルタント、事務局員よりなる。

#### (4) 参加者の役割

1) グループメンバー (通常数名、5～10名：多すぎないこと)

各グループのメンバーは、セッションごとに交代して、つぎの役割を分担する。

①討論進行係 (リーダー) 1名

②記録係 (レコーダー) 1～2名1人は全体討議でグループ討議の内容を発表するために模造紙、オーバーヘッド用紙など書きまとめる。1人は後日に印刷公表される記録のために、レポート用紙に討議の内容をまとめ、事務担当者に提出する。

③報告係 (レポーター) 1名全体討議で、決められた時間内に討議の内容を発表する。

2) タスクフォース (taskforce) あるいはファシリテーター (facilitator) (グループ数に相当する人数) ワークショップの目標の設定、資源の整備、各セッションの目標の明示、活発な討論のための雰囲気作り、必要に応じての情報入力、活動の鼓舞、種々の評価など、運営・促進・記録をし、毎日終了後に評価し、翌日の修正をする。

3) コンサルタント：助言・指導、必要に応じてミニレクチャーなどを行う。

### 3. ワークショップの進め方

#### (1) 導入＝アイスブレイキング (解氷)

活発な討論の雰囲気を構成するために、まず参加者間のコミュニケーションを図ることが重要である。それをアイスブレイキングと呼んでいる。そのために、全体の10～20%の時間を用いても惜しくない。その方法として、自己紹介、他己紹介、コーヒープレイク、パーティー (食事、歌、踊りなど)、ゲームなどがある。

## (2) 展開＝作業

- 1) ワークショップは全体が集まる全体討議（プレナリーセッション）と、グループに分かれて活動するグループ討議（グループセッション）を交互にもつことにより進められる。
  - 2) グループは数グループを設け、各グループが異質の活動領域を持つメンバーで構成されるのが望ましい。
  - 3) 各グループは目標達成のため、討議、とりまとめ、プレナリーセッションでの発表と討議、評価等の活動を行う。
  - 4) 各グループには1人のタスクフォースが付き、グループの活動の進行を助ける。
- (3) 評価個人、グループやタスクフォースをアンケート、テスト等により相互に評価する。

## 4. ワークショップの期待効果

- (1) 個人およびグループの行動が、他人または他グループを通じて客観化できる（鏡影現象）。自己の行動変容とモチベーションの増進が起こる。
- (2) 課題達成によって、決断力や実行力が養成できる。
- (3) 自由な討議を通じて、人間関係の重要性について理解を深めることができる。
- (4) グループ活動を通じ、グループダイナミックス（チームワークや相互啓蒙等）の有用性を体験的に理解できる。ある事項に対する合意を形成できる。

## 5. ワークショップ成功の条件

- (1) WSのすべてのメンバーの積極的な参加。  
全員が最初から終了まで参加し、脱落者があってはならない。
- (2) WSの成功の責任は、参加者全員にある。
- (3) WSのメンバーは、互いにResource Personとして働く。
- (4) タスクフォースは、グループ討論が活発に進む雰囲気作りに配慮し、その進行を見守り、適切な情報を供給する責任があるが、強圧的に方向づけることのないように心がける。
- (5) グループとしての学習と円滑なコミュニケーションが、目標を達成するために極めて重要である。
- (6) 参加者はグループ討論をより効果的にするために、建設的で批判的な意見を述べる。
- (7) 最も大切なことは、どのような質問でも無意味ではないと認識することである。

平成 22 年 8 月 10 日  
北海道医療大学 FD

資料 2

## 学生の資質に関する資料

### ○資質とは何か

才能、基礎学力、学習意欲、学習などで要請される総合力、人間力  
明確な定義はない

### ○大学で求められる資質とは何か

#### 測りやすいもの

1. 知識、狭義の技能
2. 基礎学力

#### 測りにくいもの

1. 知的好奇心  
何故？ 結果だけでなく過程に興味を抱く
2. 集中力・持続力  
時間のかかる作業を面倒がらない、時間を要して課題に取り組む
3. 主体性・自立性  
自身の考えをもつことができる
4. 柔軟性・協調性  
他者から教わる・他者と教え合うことができる
5. コミュニケーション能力  
学び合う時のコミュニケーション、チームワークを組むときのコミュニケーション
6. 思考力・論理性  
現実と理論、理論と理論とを連結させて思考できる

---

平成 22 年 8 月 10 日  
北海道医療大学 FD

資料 3

## 薬学部のFD研修（テーマ編）テーマ

### テーマ：学生の学力向上を目指した薬剤師養成教育の実践

趣旨：最近、薬学部学生の基礎学力低下を実感することが多くなり、社会の求なる質の高い薬剤師養成教育を行なうに当り全教員が取り組むべき大きな問題となっています。そこで薬学部では昨年度、薬学部FD委員会主催で薬学教育セミナー・ワークショップを開催し、薬学部学生の低学力化の現状と対策について議論を行ないました。そこで得られた対策は、大学・学部として出来るもの、教員個人で出来るものなどに大別されましたが、実践のための具体案作成までには至っておりません。そこで今回のFD研修では、薬学部学生の学力の問題点を再度洗い出し、それに対する大学・学部として実践可能な具体的対策を検討することを目的とします。

---

## 歯学部のFD研修（テーマ編）テーマ

### テーマ：低学力学生（または卒延者）の選定と具体的授業方法について

趣旨：近年、卒業試験基準をクリアできず、長期年にわたって6年生を続けている学生が増加傾向にある。現在歯学部では、その卒延者を基礎系講座に配属し、勉強机などの環境を整えると同時に学習習慣の育成を図っている。しかし、卒延者の多くは、「勉強方法が分からない」「ノートがない」「分からない所がわからない」などの学生である。歯学部では卒業試験基準を見直したり、特別授業、フィードバック授業などを試みているが、決定的な方策には達していない。このような課題をFD研修で討議し、妙案を模索したい。

---

## 看護福祉学部看護学科のFD研修（テーマ編）テーマ

### テーマ：学生が臨床実践能力をいかに身につけるか

#### ～学生の到達度と科目間のリンケージ

趣旨：看護学科では、これまで多様な資質の学生に応じて、各教科目でさまざまな工夫・改善しながら教育を進めてきました。しかしながら、昨今、臨地実習で単位を落とす学生が若干名ながら増えている傾向にあります。一方、新カリキュラムでも謳われているように、看護基礎教育の段階から臨床実践能力をいかに身につけるかが課題となっています。そこで、今年度、看護学科FDを立ち上げ、科目間を越えて話し合うことで、改めて現状の課題を見出し、学生が状況に応じた的確な判断力・実践力を身につけることができるように、学生の到達度と教育方法について、組織的に検討することを目的として、本テーマを取り上げました。

---

## 看護福祉学部臨床福祉学科のFD研修（テーマ編）テーマ

### テーマ：学生の生活・就学支援にむけて

趣旨：対人援助にかかわる職業人を養成する本学において、健康をキーワードとして、その意味付けをはかることは、きわめて重要であると考えられる。本学新入学生を対象とした「自覚的健康感に関する疫学調査」の結果、「生活習慣が悪い群では、自覚症状の有訴率が高く、男女共に慢性的な抑うつ感や疲労感、イライラ感が見受けられる」、したがって、「良い生活習慣を守ることは心身の健康状態を良好に保つ上で有効であると推察できる」ということが示唆されている。健康生活習慣を実践することは体調を良好に保ち自覚的健康感を高めることに有効であり、豊かな人間関係を構築していく礎となり得る。これらのことは、学生生活を有意義なものにしていく上できわめて重要である。そこで、本研修では、欠席回数が多い学生や就学意欲が低い学生を想定して、どのような支援が出来るのかを検討し、具体的支援策を案出する。

---

## 心理科学部臨床心理学科／言語聴覚療法学科のFD研修（テーマ編）テーマ

### テーマ：学生の学力の多様化とカリキュラムの実質化に向けて

趣旨：心理科学部では、学生の資質の多様化に対応し、大学教育へのスムーズな移行・意思伝達の技量の確立などの能力を身につけるために導入教育・文章指導などを導入し、カリキュラム改変を実施してきた。科目の配当は、それぞれの学科の専門領域の理解・深化を目的に体系化・構造化し各学年に配当しているが、学生の資質の多様化に対応した学修支援科目を含むカリキュラム編成、履修科目数・修得単位数の弾力化、科目の配当学年等を検討したい。

---

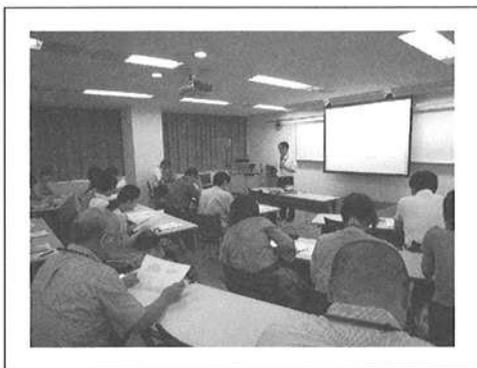
---

## アルバム

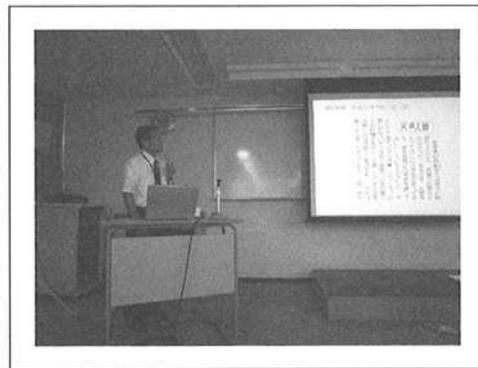
アルバム



研修会場にて まずは記念撮影



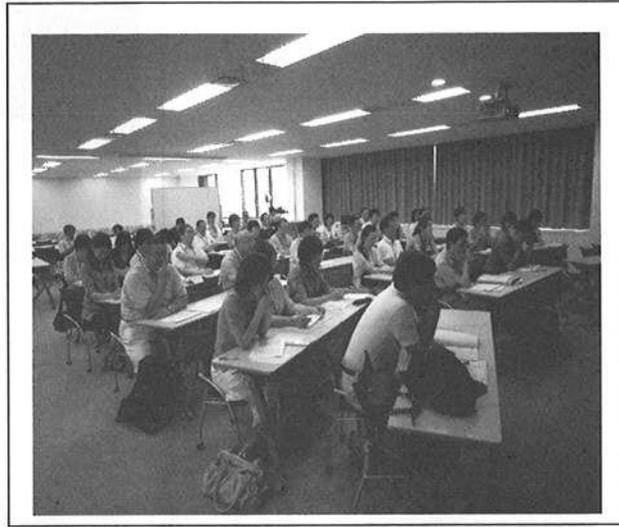
国永FD委員長の挨拶



大野副学長の講話



参加者の自己紹介



熱心に話を聴く参加者

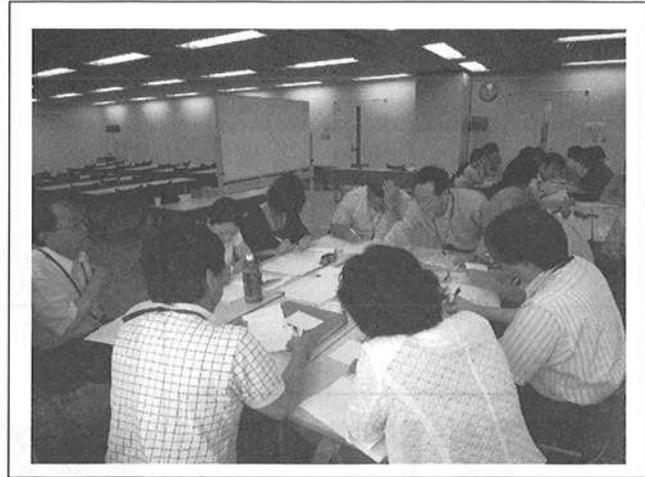


自己紹介 2



自己紹介 3

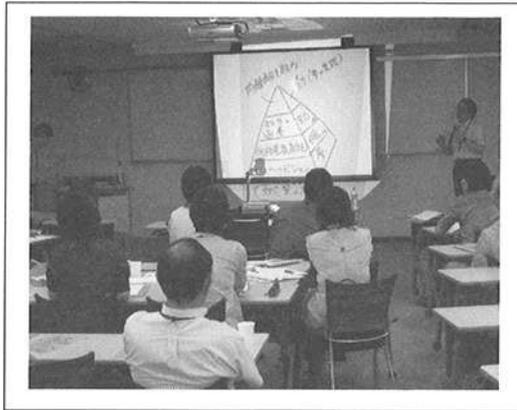
グループワークで  
テーマを検討



WS 1での議論

WS2、3で  
個別テーマの検討

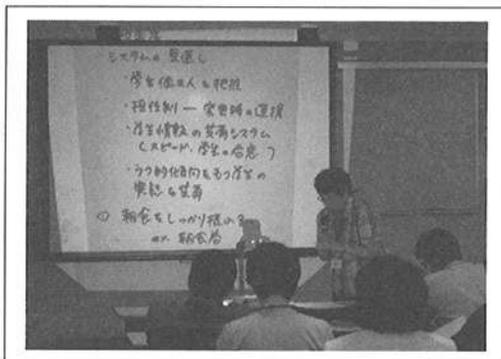




発表



活発な質疑応答

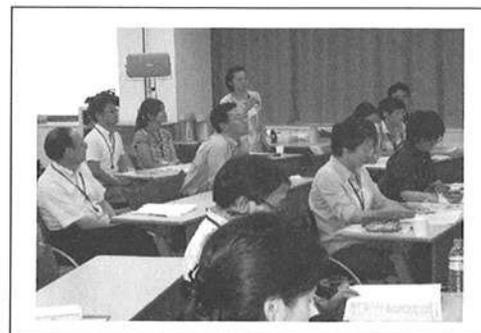


発表にも力が入る



積極的な質問

最後まで活発な討論が行われた





〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

Tel 0133-23-1211 fax 0133-23-1669

URL: <http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/index.html>